

坂東一男遺詠・遺文集

あ
さ
ひ

—附

追悼歌・文集—



明治天皇御製（明治四十二年）

日

さしのぼる朝日のごとくさはやかにもたまほしきはこころなりけり

目次

はしがき

遺詠・遺文

第一章 遺詠

昭和六十三年

平成元年

平成三年

平成四年

平成五年

平成六年

平成七年

平成八年

平成十年

平成十三年

平成十四年

平成十五年

平成十六年

平成十七年

平成十八年

平成十九年

平成二十年

6

6

7

8

8

9

10

11

13

13

14

14

15

16

17

18

19

平成二十一年	21
平成二十二年	25
平成二十三年	27
平成二十四年	33
平成二十五年	37
平成二十六年	42
平成二十七年	50

第二章 遺文

時流に勇氣ある発言を（昭和四十年十二月十日号『国民同胞』所載）	56
日本人として忘れてはならないこと―高校生の娘に―（昭和五十九年六月十日号『国民同胞』所載）	57
最近思ふこと―教育の目ざすものを明確に―（昭和六十年五月十日号『国民同胞』所載）	60
樂しき哉！「敷島の道」（平成三年八月七日、第三十六回全国学生青年太合宿教室（厚木）の合宿導入講義）	62
『思はざる』ことのおこりて……』（平成七年三月十日号『国民同胞』所載）	74
少子化の時流に悼さして―七人の子供達の義務教育を終へて思ふこと― （平成十一年四月十日号『国民同胞』所載）	77
著書紹介『魂を抜かれた日本人』中條高德 著（平成十三年八月十日号『国民同胞』所載）	79
新刊紹介（平成十五年七月十日）痛快なる憂國警世の書 林秀彦著	81
『悲しいときの勇氣―日本人のための幸福論』（平成十五年七月十日号『国民同胞』所載）	81

建国記念の日に想ふ―建国の理想を仰ぎ、熱き心を持たう―	(平成十七年二月十日号『国民同胞』所載)	83
近頃、痛切に思ふこと―わがノート【古稀の徒然】から	(平成二十二年十一月十日号『国民同胞』所載)	85
近頃、痛切に思ふこと―わがノート【古稀の徒然】からそのII―	(平成二十七年三月十日号『国民同胞』所載)	87
戦後七十年に思ふ	(瓊林友の会会報平成二十七年七月三十日号所載)	90

附 献歌・思ひ出の記

献歌	96
思ひ出の記	102

坂東一男さんの略年譜

編集後記	122
------	-----

はしがき

坂東一男さんは、アサヒビール(株)に入社されてから退職されるまで一貫して営業を担当されたが、坂東さんと
言へばアサヒビール、アサヒビールと言へば坂東さんといふほどに、坂東さんにとってアサヒビールの営業は、
「世のため」「人のため」、そして「自分のため」の天職であるとの確信があった。坂東さんにそのやうな誇りと自
信を与へる契機となつた一首がある。土井晚翠(「荒城の月」作詞)の歌である。

酒といふ文字をみてさへ嬉しきに飲めといふ人神か仏か

この歌に出会つたときの坂東さんのうれしさうな、また合点した笑顔が浮ぶやうである。ご自身も豪快によく飲
み愉快に語られた。時局に話が及べば憂憤の情止めがたく、われわれへの叱咤激励も度々であった。飲み、語り、
真つ直ぐに進む、その行動の果敢さは剛毅そのものであったが、その一方で、相手の心をどこまでも慮ることので
きる柔和の人でもあった。「お客様の立場になる」といふのとは違ふ、もつと奥深いところからにじみ出る坂東さん
の生き方そのものであったと思ふ。「ありがたうございます、との感謝の念を忘れるな」、「人に迷惑をかけるな」な
どとよく語られたが、それは、われわれは一人で生きてゐるのではないといふ痛感があったからだらうと思ふ。

毎朝、明治天皇のお歌を拝誦して居られたが、ご自身の生き方をお歌に仰ぎつつ心を整へられてゐたのであらう。
拝誦の朗々とした声が聞えてくるやうだ。剛毅と柔和、それをひとつ心に統べ収めながら、人の踏むべき道を堂々
と生き抜いた人であった。

遺
詠

「澤部通信」 十二号を受け取りて（二月二十四日）

をちこちの便りをのせし澤部通信またるうちに今日届けけり
あたらしき年のほぎごと言ひ交す食卓囲みて我子らとともにも
かるたとる子等の声々ひびきけり年のはじめの陽光をあびて

剛（次男）と直子（五女）の発表会場にて（二月二十七日）

ピアノやオルガンの音いきいきとひびきわたれる発表会場

木琴をカスタネットをひたすらにうちてたたきぬ幼子たちは

ゑみたたへ「もう春ですよ」とよろこびを体いっばい歌ふ吾子はも

大太鼓ドドンと打ちて小太鼓を落とす子もあり器楽合奏

くりかへし声はりあげて歌ふかな「すてきな世界」「子供の世界」と

「アイスクリーム」の声のみひときはたからかに子らの気持ちのたかまり乗せて

単身生活に別れを告げる転勤の挨拶状に

雪深き越後の國ゆ集ひ来し親子九人そろひて夕餉樂しも

平成元年

岡村義一先輩から古稀のお祝ひの歌集『わすれな草』を戴きし御礼に（九月十六日）
をりをりのおもひそのままつづられし『わすれな草』の歌すばらしき

富山の岸本弘兄から送り来し『あつぎ・1』に掲載されし学生の歌をよみて

カルデラのかほりを詠みし歌うれし『あつぎ・1』の便り届きて

ヨーロッパ三カ国視察の歌日記（十月十日から十五日）

スイス

國民はみな兵にして独立を守り来たりしスイスの國は

永世中立かかげし國の学校に備へつけられしシエルターの見ゆ

イタリア

子等宛にユングフラウヨツホの郵便局ゆ思ひをこめて絵葉書を出す

七百年の歴史を誇る古き街・カペルの橋は夕陽に映ゆる

ドイツ

朝もやのしじまの中に活き活きと廃品回収にいそしむ人見ゆ

みどり色黄色に分ちゴミ函の置かれてありぬドイツの街角

この國の自販機の色、デザインは美觀を重んじ街にマツチす
久々の和食と酒に心地よく歌もいでたり今宵の集ひは

帰国の機上にて

しらじらと明けゆく空のまなかひに雪と氷のロシア平原

平成四年

大阪への転勤の歓迎会にて（十一月十一日）

久々にまみゆる友の懐かしく昔話に時を忘れぬ

あの友のかの日々のこと語らひて友らと酌めばうましこの酒

近畿圏支社長を拝命して

長として若き社員なかまの先頭に立ちて果さむ重き務めをつと

平成五年

常陸宮正仁、華子両殿下が昨年八月六日に、小野田市にある富士商の

研修センターを、御訪問になつた時のお話を藤田社長より聞きて（八月六日）

こぞの夏訪ひたまひし宮様の案内あないの大役はたせしときく

大役を無事に終へしと嬉しげに若きこの大人語り給ひぬ

七日朝

お手植^{をがたま}の黄心樹の木に日の本の末安かれとひた祈るなり（黄心樹は正仁殿下の御印）
あさもやの彼方にかすむ馬関の海を波をけたてて漁り船のゆく

枯葉つむ石段昇りて大浜の神社に吟じぬ「ますらを」の歌を（三井甲之先生のお歌）

関西地区の活動状況報告に添へて（四月二日）

外国へ出張立^{たつ}つ友にとどけよと若き友らの活動したたむ

忙しきひびなりけむに連絡をして来る意欲に我もこたへむ

【三ツ矢サイダー】生誕百十周年記念式典にて祭文奏上を行ふ（十月四日）

さはやかに風吹き渡りみ祭りの時を迎へぬ今日の佳き日に

柏手を打ちて進みて神前に声高らかに祭文をよむ

住吉の神のお告げに三本の矢放ち龍を倒せしといふ（源満仲の伝説、三ツ矢の名の由来）

傷負ひし鷹湯浴みしてたちまちに生きかへりしとふ平野の霊水

時過ぎて明治の御代に上梓せり平野の水を「三ツ矢」と名付け

大御代の皇太子殿下の御飲物に献上されし三ツ矢サイダー（後の大正天皇）

平成六年

いにしへのロマン伝ふるブランドを守りゆきなむ若き社員なかまと

阪神大震災の救援に尽力する自衛隊に感謝の意を込め飲料水を送りたれば第三師団長・

浅井輝久氏より、活動状況の詳細と歌を添へた御礼の手紙を頂きて（三月二十二日）

わが友のすすめに従ひ拙なくもかへしの文に歌添へむとす

自衛隊の救援活動まざまざと目に見る如しみ文たどれば

しきしまの大和心を奮ひつつ指揮とり給ふ師団長はも

被災地の救援のさま物語る写真うつしえ三葉涙ぐましも

集ひたる四十人の友どちにみ文を披露す声たからかに

春雨にけふる山路をくだりゆく四条畷の神社めざして

師の君の音頭に合せ唱ひ行く「吉野を出でて」となつかしき歌を

野間口兄の御霊を偲びて（平成七年八月十八日に御逝去）

稲穂稔る季節になりて届きたるみ魂祭りの案内あないの刷り文す

この夏も慰霊の命みことに加へたり野間口大人おしの尊き御名みなを

忙がしき日々の続くも世の乱れただ糾しゆきなむ大人おしいまさずとも

平成七年

足原茂徳前厚木市長に感謝して

地方自治の制約の下若き日の誓ひを果たし給ひし大人うしよ

将来の日本を背負ふ若きらを育てあげむと尽し給ひし

合宿の導入講義を行ひし厚木の自然教室懐かしきかな

七沢の教室育ちの若者の活躍すらむ時ぞ待たるる

長男・浩、服部薫嬢を娶る、その結婚式の折に

(三月十六日・リーガロイヤルホテル・早稲田に於て挙式)

過ぎ去りしさまざまのこと浮かび来ぬ浩と薫の晴れの挙式に

永遠とほの愛を神のみまへに誓ひたる姿にわが祖母涙ぐみます

三十年を経て巢立ち行く浩こと薫よめの話に花咲く披露宴みまかな

我がことを情熱の父親ひとフアイトマンと述ぶるスピーチを面映ゆく聞く

さはやかな新郎と聞けば子育ての苦勞消えゆく心地するなり

巢立ち行く息子と嫁の晴れ姿に親の幸せしみじみ思ふ

わが思ひ見透かすとき祝電を賜たまひし人の心嬉しき

八人目の子に生まれし心地する息子の嫁を迎へし今日は(坂東さんは七人の子供の父親)

平成八年

今日の良き門出を胸に二人して道行き給へとただ祈るなり

五月十八日、次女恵子嫁ぐ

嫁ぐ朝ありがたうとお辞儀して腕時計をくるる娘よ
くれなゐにつつじ咲き競ふ庭先に娘送りて門出を祝ふ

披露宴会場（ホテル・ニューオータニ）にて

花嫁の父の心境いかばかりと問ふ人のあれば胸つまり来る
新なる二人の行末保証するとのスピーチ賜り有難きかな
仲人のわが子をたたふる言の葉に思はず涙す宴の席に
吾子くれし時計涙にくもりけり皆様方に御礼述べつつ

野間口兄の遺稿集を拝受して

雪降る日葉山の宿に語らひし友を偲べば思ひつきざり
時巡り年は経れども若き日の志ふるひて生きし友はも
我が志萎えむとするとき朗らかに励ましくれし野間口兄よ
先達の生命ささげて守り来し大和島根を守りて生きむ

『乃木將軍と日本人』を輪読して（関西信和会の合宿にて）

祖先らの國守らむとたたかひし旅順の歴史を友らと学ぶみおや

爾靈山を戦ひに勝つ要なりと決断されたる乃木將軍はにれいざん

戦勝の祝賀の宴の片隅に涙にくれます將軍あはれうたげ

國守らむとあまたの兵士とご子息のいのちを捧げ給ひけるかな

敵軍も苦境にあるを忘るなど励まし武士道貫き給ひし

還暦の年を迎へし我なれど伝へゆきたし勲の歴史をいさを

平成十年

アサヒ飲料（株）首都圏支社長を拜命して皇居にて詠む

秋深む大内山の広前にビッグジャンプの完遂誓ふ

平成十三年

退任の挨拶状に添へて（三月三十日）

アサヒ飲料（株）の専務取締役を辞任し、非常勤顧問に就任

桜咲き柳青める「旨茶春」無限の市場に夢をつなぎて（「旨茶春」は新商品）

澤部和道君と山口花子さんの仲人をつとめて（五月二十七日）東京都 坂東一男

あしはらの國を思ひて出逢ひたる新夫婦めをとを祝ふ宴えけ樂しも

百年ちとせの昔を讀ふるこの佳き日誓ひし永遠とほの契り忘るな（日本海々戦勝利の日）

日本武尊・弟橘媛命のまつらるる大鳥神社の守らむ新夫婦めをと

笙しょうの笛太鼓おびの音も厳おそかに古式ふるまじゆかしき神前結婚

ご両親兄弟姉妹皆揃めをとひ新夫婦を祝ふ両家に幸あれ

年頭に当りて

しきしまの大和心を伝へむと『古事記ふるごとぶみのCD』を大拡販ひろめゆきたし

（年賀状）

孫の七五三・明治神宮にて

広前にぬかづく我と子と孫の自づと合あひし拍手かしばての音

平成十四年

平成十五年

慰靈祭献詠歌（九月二十三日）

蟬もなきアキアカネ舞ふ暑き日に御靈祭りの献歌詠みゆく
師の君や先に逝きたるみ友等に夏合宿の成果語らん
御殿場の友等を誘ひ学びたしこの道統の基の文を

（年賀状）

御題「幸」に寄せて

我子七人おのおのものに育ちゆき一煎の茶に幸せかみしむ

加納祐五先生を星野貢さんと訪ふ（二月十六日）

耳そばだて目輝やかし語り合ふ師の君二人楽しげにみゆ
正大寮に学びし昔偲びつつ語り給ふか師の君お二人
我もまたつらなりゆかん先達の志を学ぶこの道統に

平成十六年

義母山本リウ、九十七歳で逝く（長内俊平先生宛・三月二十六日）

九十七歳の年月重ね旅立ちし義母の一生を誇りにぞ思ふ

四十年間我等夫婦や孫達の行く末案じつつ義母逝きませり

あじの子は九人の孫と曾孫等の見送り受けて故郷に逝く

（※詠者註 戒名が決まる迄の間、仏様を「あじの子」と呼ぶ旨お導師より伺ふ）

慰霊祭献詠歌（九月二十三日）

大人達の御顔偲びつつ綴りたる祭文奏上聞こしめ給へ

さ霧たつ阿蘇の齋庭にかがり火を焚きて迎ふるみ祖先のみ霊

み祖先らに学びの成果伝へむと心をこめて祭文をよむ

天がける大人らの御霊とことには我等を導き見守り給へ

理事・監事への連絡文に添へて（二月十五日）

思はざる足の負傷で心ならずも病院生活を送りけるかな

合宿や集ひのことども想ひつつ主治医に従ひりハビリに励みぬ

平成十七年

北村公一兄へ（三月十七日）

「天皇皇后両陛下奉迎文集」（関西信和会刊）を読み

懐かしき名前のみゆる奉迎の記録読みゆき友等偲びつ

すめろぎ 天皇の御姿間近に仰ぎみる友等の感激ひたにせまりく

慰霊祭献詠歌 — 故小田村先生の六年祭（六月四日）に参列して—

国思ふ若き仲間のをちこちゆ集ひ来たりて営むみ慰霊祭まつり

西海の長崎佐世保ゆ日の本の乱れ糺せし若き同志は

逝きまして六年の月日を経たれども写真うつしえの笑みに励まされ生く

若き等と学びの道を究めつつ継ぎてゆきたしこの道統を

平成十八年

平成十八年慰霊祭献詠 — 廣瀬誠先生をお偲びして—

大好きなる相撲すまふの弥栄いやさか念ねんじつつしこ名の濫みだれを憂ひ給ひき

「皇」名乗る力士を観るたび憤り覚ゆと熱く語り給ひき

「旺」または「晃」のしこ名を師の君は提案し給へどいまだ直らず

日の本の伝統文化を究めたる師のみ教へを継ぎてゆきたし

星野貢先生をお偲びして（長内俊平先生宛・三月八日）

営業の神様ですとほめられて古事記CDの拡販引き受く

すごいなあすごいなあと感嘆し売れゆき喜ぶ大人の笑顔は

古事記の朗読流るる葬場に大人を偲びて同志集ひ来

古希を迎へて（五月二十日）

今日こそは明日こそはと念じつつ無事に迎へし七十路の朝

七十路の誕生日祝ふ朝餉にはお頭付きあり気遣ひ嬉しも

毎々の「短歌通信」の郵送に感謝して（折田豊生さん宛）

青砥大人澤部同志を引き継ぎし肥後の便りは早や四十九号

をちこちの同志の消息伝へたる「短歌通信」楽しく拝せり

多忙なる務めの中に刷文をまとむる友のご苦勞偲びつ

「北京オリンピック」感動の歌

北島康介、百メートル平泳ぎ、世界新で連覇（八月十一日）

君が代の調しらべにのりて厳おこせかに日の丸の旗メインポールに

「チヨ―気持ちよし」と熱狂の中見事なりラストのひとかき世界記録に

金色のメダルをかかげ誇らしくプールサイドに水の王者は

何も言へずと言葉詰まらせ涙ぐむ二冠で連覇の北島選手

ソフトボール、金メダル（八月二十一日）

球場の夜空に揚がる日章旗全国民の夢ひるがへる

手を繋つなぎ笑みを浮かべる十五人表彰台のソフトの乙女ら

朝も投げ夜も投げ抜く鉄腕上野金メダルへの氣迫満々

気持ちこそ負けてならじとスポーツの原点たもと糾たす談話すがしも

男子陸上四百メートルリレー（塚原・末次・高平・朝原、初メダル（八月二十二日）

ジャマイカやトリニダード・トバゴを追ひあげてゴールに駆け込むアンカー朝原

おのおのおの日の丸の旗肩に掛けトラック廻る姿誇らし

ウイニングラン四人の笑顔輝きてチームワークのバトンタッチ思はる

「最高です、最高です」と息はづまず第一走者の塚原選手

「全員の力合せて駆け抜けた」と二走の末次は思ひを語る

トラックの初のメダルは声援のたまものと語る三走高平

寄書きの日の丸の旗肩に掛け嬉しさあらはすアンカー朝原

最高の舞台に立ちて気持ちよしと八十年ぶりのトラックメダリスト

ケニヤのワンジル選手、五輪記録でマラソン優勝（八月二十四日）

ケニヤ生れ仙台育ちのワンジル選手二十五キロのスパートみごと

高温の北京のコース走りぬき両手を挙げてトラック駆け抜く

夏なるも冬のレースとかはり無し超ハイペースの北京マラソン

男子マラソンのラスト（最下位七十六位）でゴールの佐藤敦之選手

ともかくもゴールせむとの意思あるも足取り重く引きずることし

スタンドにコースに一礼気持ちよし無念の思ひを次につなげよ

岸本弘兄宛の便りに添へて（十一月二十九日）

「古事記CD」 拡販の決意

敷島の大和心を伝へんと「古事記CD」ひろめゆきたし

夜久先生をお偲びして

天地あめつちの開けしときゆと聴きながら夜久先生やひくの偉業を偲びまつらん

心知る友の力作朗々と読みつつ偲ぶ逝きし大人おとしら等を

先に逝きし吾子あこ・剛の遺作「安芸之助の夢」のことに触れてあれば

先き逝きし吾子の遺作を讃へたる高志よりの文嬉しく拝す

稲津利比古兄宛への便りに添へて（十二月十五日）

無念なり体調不良で入院す同志の想ひに応へられずに

「大和路の旅」を詠ふ（大和三山と聖徳太子御陵・三月十六日〜十九日）

新宿プラザホテルに集ふ

聖徳王の御陵への旅に集ひたる敵御魂いづのみたまと瑞御魂しづのみたまは

奈良の朝

平成二十一年

車窓より眺むる月の影さやけし三山の旅に心浮き立つ

橘寺にて

不思議なる飛鳥あすかの石造物二面石人の心の善悪写すと

橘の根元に写経埋めしとき白花タンポポ目に止まりけり

畝傍山口神社

心こめ願ひを込めて写したる般若心経埋めて祈りぬ

平安の祈りを込めて写したる写経を埋めし神の広前

ピーヒョロと篠笛響ける畝傍山念のこもれる砂を賜るたまは

耳成山

耳成いしへの謂れを聞きて感心す古よりの大和心に

万葉の歌にも詠まれし妻取りの伝説嬉しロマンあふれて

ケキョケキョと鳴く鶯に励まされ残る三分を頑張り登る

春めきて柳青める耳成の池に写経を沈め弔ふ

(天の岩戸神社)

迷ひ路みちナビも狂はず香具山かぐやまの難渋しの凌ぐ神業運転

玉垣たまがきに真竹自生し神祀まつる神話の故郷岩戸神社は

天照大神のお隠れ賜ふ四巨石の根元に埋むる般若心経

心込め写せし写経燃えつきて神の靈氣を払ふが如し

篠笛の調しらべに和してパンパンと靈竹はじけ邪氣を祓ふか

西の方夕陽沈みぬ二上山今日のお参り功德もあらたか

ゆふげ
夕餉の談笑

おのおのも好みのお食を注文し今日一日の感慨語らふ

関西の自慢の味を満喫すお好み焼きの香りとボリユーム

しながきんえいふくじ
磯長山叡福寺

菊のご紋に囲まれて緑の山にましますは聖徳太子の御陵なるかな

篠笛の静かなる調しらべ流れたり磯長しながの林の仏舍利塔は

天牛師の祈りをあはせ埋めてゆく心を込めて写せし心経

しぎざん
信貴山奥の院

必勝の祈願の籠もれる焼米の伝説つたふ汗かき毘沙門天

斑鳩神社 天満宮

梅の花枝垂れの梅も満開みちりあけの道真祀る天満宮は

本日の仕上げの写経埋め込める天牛宮司の裕けきかんばせ顔

法隆寺の鐘

伝へあるお寺の鐘が鳴り響き露店で求むるおみやげの品

興福寺

戦乱の伝へを聴きてご朱印を頂き閉づる大和の旅を

様々の心配事を乗り越えて無事に帰宅す深夜のバスで

病床にて厚木合宿を想ふ―慰霊祭献詠歌（九月二十三日）―

敷島の道楽しめと若きらに我は語りし厚木合宿（平成三年夏厚木にての初の合宿）

たまゆらのいのち惜しむか鳴く蝉の声のせつなき採血の朝

靖国の英霊みたまに祈らず理屈云ふ総理に神の加護はなかりし

十一月十二日、朝一番に日の丸を掲げ、坂下門の記帳所に出向く

天皇陛下御即位二十年を寿ぐ歌

厳かなる鐘の音聞ゆ記帳所の坂下門の玉砂利踏めば

手を洗ひ心しづめて目をとづる記帳の前の昂るひととき

臣一男と心をこめて帳面に記して言祝ぐ御即位二十年

新たなる力湧き来る十年後も再び御即位言祝ぎまつらん

夕方テレビにて二重橋の両陛下を拝し

寄り添ひて式典組曲を聴き給ふ御姿仰げば涙あふれく

寒きなか楽しいひとときを有難うとの天皇陛下の御言葉うれし

○

おぞましや数の論理でおこりたる民主党政権を許すべきやは

平成二十二年

御題「光」に寄せて

木の間よりもれくる陽光身に浴びて御製を拝す朝のひと時

朝青龍の引退を惜しみその功績を讃ふる歌（二月二十三日）

遙かなる国モンゴルゆ日の本の相撲にかけし若武者明德あきのり（※朝青龍は高知の明德塾高校に相撲留学した。）

横綱を指すと国旗に誓ひしは若松部屋に入門のとき（※モンゴル国旗を部屋に掲げ決意を表した。）

早朝の猛烈稽古を耐へ抜きて土俵の鬼と勝負に徹す

一年ひいていに六場所すべて賜杯抱き一人横綱の土俵を守りき（※平成十六年九州場所から十七年九州場所まで七連覇）

大横綱の証あかしなるなり両国に掲げられたる二十五の額（※平成十四年九州場所で初優勝以来八年間で二十五回優勝）

嗚呼あゝ悔し優勝直後の横綱の無念の涙の引退表明

意に染まぬ引退なりけむ自らの起こせし責めを取ると言へども

大好きとふ大阪場所を前にして身を引く横綱いさぎよ潔いさぎよきかな（※大阪・春場所は七年間で四回優勝）

陰になり日向になりて支へ来し芋縄大人の姿たふとし（※芋縄氏は高砂親方の岳父）

国の母（芋縄夫人）逝きまししをり御霊前を一人弔ひし優しき横綱

※便り抜粋

〔前略〕—この度引退させられた横綱朝青龍関とは若干の交流があり、彼の一人横綱時代の活躍とその功績を忘れられずその思ひを詠んだ次第です。横綱の属してゐた高砂部屋の親方・高砂大五郎氏（元関朝潮太郎）の岳父・芋縄純一氏はアサヒビール時代に深い御縁を賜つた恩人の一人です。—〔中略〕—芋縄氏は五、六年前のことですが、みまかられた広瀬誠生先生の日本相撲協会の対する「皇」についての御提言の折、協会トップに働きかけをして下さつた方でもあります。〔国民同胞〕平成十七年三月十日第五十四号参照。残念乍らその結果は出ませんでした。〔同氏は〕小生のアサヒビール時代に大変御支援を賜つた方で、今回の横綱の一方的なマスコミによる批判には少々我慢がならぬ心懐を抱いた次第です。—〔後略〕

想ひの丈を綴りて

先逝きし広瀬の大人の御懸念が協会ゆさぶる不祥事生めり

協会の根本ただ糺さぬ無作為が大横綱の引退まねけり

（小縣保子様への哀悼歌・九月十一日御逝去）

大作の「長崎街道」みごとなり一年有余の労苦の絵筆ぞ

背の君と我等をもてなし給ひたる手造り自慢の長崎の味

笑みたたへ暁星健児の熱弁を聴きつつ御酒をすすめ給ひぬ

同窓の集ひにて『古事記』を語る

星野大人の喜び給ふかんばせを偲びつつ語る『古事記』を

(折田豊生さん宛・十二月二十八日)

年の瀬の肥後よりの歌文繙ひもときて同志の消息知るは楽しみ

御題「葉」に寄せて(明治神宮に詣でて表参道の光のページェントを歩む)

葉を落とし光の花を咲かせたる樹々を楽しむ妻と娘と

(東京地区短歌の会・一月二十二日)

一月二日、日本晴れ、皇居に参賀す

晴れ渡るみ空を仰ぎ日の丸を掲げて言祝ことばぐ正月の朝

我が妹の真心こゝろこもるお雑煮に身体を温め参賀に向く

数多あまたなる人らにまじり警官の指示に従ふ外苑広場

手荷物と身体の検査を受けし後我も連なる参賀の列に

平成二十三年

外国とくこくの観光客の一行も見えて賑はふ皇居前広場

二重橋の鉄門開き人の列しづしづ進む玉砂利を踏み

カメラ手に写真うつつまを撮る参賀者もをちこちに見ゆ五列の流れに

橋の上うへにふりさけ見れば大君を慕ふ数多の国民の列

左手の宮居の庭に大君のお出ましを待つ心静かに

大君のみ姿見えて人波をとよもし挙がる萬歳の声

笑みたたへみ手振り給ふ大君のみ姿仰ぎ嬉しかりけり

「…少しでも良いお年を…」との御言葉を聴けばおのづと涙湧き来る

湧き上がる熱き思ひに日の丸の小旗打ち振り万歳唱ふ

ありがたき御言葉しみみに思ひつつ坂下りゆく乾門いぬめへと

すめくにすめくに 皇国の弥栄祈る人々と共に言祝ぎ心清々し

一月十七日、十六年前の阪神大震災を思ひ返して（当時アサヒ飲料近畿圏支社長・傘下の社員四百人）

十六年既に経ちけり突然の地震なみに驚き目覚めたる日ゆ

今日のごと寒き朝あしたに忘れえぬ地震襲ひけり阪神淡路を

我が社員ぶかの無事をひたすら祈りつつ徒歩にて北浜の会社を目指しき

自動車も電車も通はぬ路たどり漸く着きし北浜の地に

我が社員は全員無事と知り得しは地震より幾日も経ちし後の日
疲れたる我が身いとはず復興にひたすらつとめし日々懐かしき
しばらくは養生せよと我が主治医告ぐるも無視し働き続けし
あの当時無理を重ねし我が病ひ重くなれども悔いは残らず

病院詠草（三月十八〜二十九日 広尾・日赤病院）

遂に日赤病院に入院す（三月十八日）

腎臓の機能いよいよ衰へて遂に入院の身とはなりけり

新たなる「人工透析」とふ施術にて腎臓の働きを補ふといふ

さまざまのデータより見て我が身には「シャント手術」が最高なりと

病院九階ラウンジよりの眺め

白雲をいだき聳ゆる富士山の雄々しき姿に励まされけり

春雨にけぐる渋谷の街並みの朝明けゆく静寂のなかに

病院での食事

お彼岸の中日言祝ぐ朝飯は尾頭つきのアジの干物ぞ

我が舌に冷たくとろくるデザートのにゼリー美味しきつかの間のとき

朝・昼・夕薄味食事食へ終へて体力・気力は健やかなりき

塩分を控へし食事も口に慣れ噛みしめ噛みしめ味はひ食す

いよいよ手術—静脈と動脈を繋ぐ手術

入院し身体も慣れし四日目に車椅子にて手術室へ向ふ

メス握る医師の腕を信頼し麻酔受くれれば唼閉ぢくる

煌々と輝く照明身に浴びて左手首にメス入れらるる

血管は想ひのほかに細くして繋ぐは難き様子にみゆる

予定より六十分も超えたれど手術は無事に終へしと聴きぬ

我が妹いもに手術は無事に終はりぬとメールを送り安堵あんどの息つく

ありがたき近代医学の治療受け命ながらふ我が幸せ思ふ

一日も早き快癒をひた願ひ治療に努め励む日々なり

澤部壽孫親子の御見舞ひの際に「澤部通信」の合本を頂く

あまたなる師友のみ歌を読みゆけば生き抜く力更に湧きくる

転勤し若き社員なかまに我が決意述べたる歌に顔赤らむる

う孫らの顔浮かび来る我が子らの結婚祝はし我が歌読めば（長男・次女）

幼子の遊戯の様の歌読めば子らの歌声聞ゆるごとし

師と友と共に歩みし歳月しるを記せし「澤部通信」有難きかな

折田豊生さん宛の便りに添へて

毎々の短歌通信有難し師友の消息つぶさにみえて

五月九日、九州より上京せし妹および義弟と会食す。その折の写真への返しにこやかに笑みたる写真手にとりて生き来し日々の生活偲びつなりはひ。久々にはらから妹弟揃ひ語らへば夕餉は美味くひととき楽しうま。

五月二十三日、小川友の会会長より絵手紙カレンダーを頂きて

被災地の復興願ふ御心のこもる手作りの夏のカレンダー

五女・直子の結婚を言祝ぐことほ（七月三十一日 於網町三井倶楽部）

結婚式の前夜家族揃ひたる夕餉の席でゆふげ

嫁ぎゆく吾娘を囲みておのおの想ひ出語る夕餉楽しもあこ

幼き日好きも嫌ひも多々ありし吾娘嫁ぐ日は明日となりぬあした

幼き日「もうすぐ春・・・」と唄ひたる吾娘嫁ぎゆく真夏の吉き日によ

当日の朝我が家の庭の蓮の花咲く

吾娘嫁ぐ朝の庭に蓮の花美しく咲くあした。寿ぐことほごとくに

産経新聞の一面トップ「エネルギーのない国は滅ぶ」を読み

吾娘嫁ぐ吉き日の朝格別の思ひにて読む産経新聞（新郎は産経新聞社勤務）

その昔ジョサンコート^{おこそ}の建てしとふ三井倶楽部^{みついくらぶ}は莊重なりき

厳かに鉦の音流るる広前に進み我らは四拍二礼す

神前に進み拍手四たび打ち夫婦の永遠をひたに祈りつ

新たなる親類となりし花婿の親兄様と杯交す

人生の新たなる門出の階段を歩む夫婦に幸あれと祈る

おのおの写真を撮る階段に並び微笑む夫婦を祝ひて

爽やかなる風吹きわたる広庭に互に両家の写真を撮る

あまたなるお祝ひの言葉頂きて吾娘の姿は輝きてあり

名物の料理の前の割り箸に吾娘の氣遣ひ思はれて嬉し

慰霊祭献詠歌（九月二十三日）

靖国の御霊を祀らぬ総理こそ皇国日本の逆賊なるぞ

熊（ロシア）と獅子（中世）虎視眈々と牙を研ぐ皇国世論の乱れをつきて

(年賀状)

お題「岸」に因みて(賀状に添へて)

まがごと
禍事のいやつぎ起りし辛卯うとしこえ八十路の岸をやそぢ目指して生きん

透析

体重と体温、血圧、血糖値、計測始まる病室の朝

左腕のシャントに託す我が命週に三日の透析のとき

三時間の透析を経て血液は老廃物除け浄化さるるも

病む我を励ます如く東京タワー春の陽を浴び凛りんと立つ見ゆ

暮れなづむ夕べの空に明々と輝きみゆる東京タワー

ラウンジゆ渋谷の街のビルの果て雪を被かぶきし富士の山聳そびゆ

透析を終へ心身は爽快に昼の牛井ことさら旨し

血圧も血糖値も共に安定し体重変動は小幅になりぬ

透析の効果なるらむ週末に退院出来むと医師くすしのたまふ

週三日の透析続け活き活きと八十路やそぢの坂を越えんと思ふ(以上十首、広尾日赤病院に入院中―三月十六―三十一日)

スカイツリーに昇る（五月二十九日）

武蔵野に新たに立ちしスカイツリーに家族と共に昇るは楽し

透析に元気をなくせしこの我を慰めんとて吾娘企あこくはだつる

ときめきのひと日始まる中野より押上駅へと向ふ電車に

をちこちゆ集ひ列なす人々と順番を待つ心弾ませ

高速のエレベーターに運ばれて束の間につく展望デッキに

眼下まなしたに広がる東京下町の景色隈なく飽かず眺むる

隅田川の岸辺に見ゆる懐かしき黄金色のアサヒのビルは

浅草寺・ビューホテルに松屋も見えて隅田川の悠然と流る

東京の街を制して凜と立つ世界一なる電波塔はも

エレベーターにて更に登りて四百五十メートルの高みに着きぬ

目もくらむ心地なりけり世界一の高き展望回廊に立つ

回廊にひと時過せごし心足り家族と記念の写真を撮りぬ

急かさることなく過せごす段取りの随所に吾娘の気遣ひ見ゆる

霞かすみ立ち富士の勇姿は見えざれば心残して回廊を去る

家族にて昼餉ひるけとりつつこもこもにあふるる思ひ語りやまずも

新しき銀座アスターの人達の心遣ひはいとすばらしき

記念碑の楨たねの木の間にゆ見上げたるスカイツリーは天突くばかり

金色に輝くアサヒの紋章の背後に聳ゆるスカイツリーは

長生はうびきの褒美なりけむ娘達とスカイツリーに登り得たるは

透析の日々の苦しみ忘れをりスカイツリーに遊びしひと日

国武忠彦兄講演会（鎌倉）にて（岸本弘兄宛・七月二十六日）

会場に早めに着きて待ちをれば懐かしき友らいや次ぎ来るまた

我が友は古事記ふるこじの成り立ちを心を込めて語り給ひぬ

「天地あめつちの初発はじめの時ゆ」と人皆と声あげ唱となふ想ひ馳せつつ

安万侶ゆ宣長を経て秀雄へと古事記は今に伝はる

心足り帰りの車中に歌詠めば友の笑顔のよみがへりくる

○

苦しみて耐へて忍びて我慢して必死で生きんこの夏の日を

国武忠彦さんの便りにそへて（七月八日）

鎌倉にいざ出かけなむ我が友の講義を聴きに雨もあがりて

合宿に共に学びし我が友の講義素晴らしユーモア溢れ

我が友は古事記ふることじの成り立ちを心を込めて語り給ひぬ

文字いじの無き古いにしへの代よに祖先みおやらは語る言葉に想おもひを込めしと

その想おもひを文字にて残し後の代に伝へし業わざは奇跡きせきならずや

「天地あめつちの初発はじめの時ゆ」と人皆と声あげ唱ふ想おもひ馳せつつ

安万呂やすまろゆ宣長のぶながを経て秀雄ひでおへと古事記ふることじは今に伝はる

産巢日うすすびとふ言葉かなめは要かなめと友は説く古事記ふることじの文たじ辿りつつ

この一日ひとひ疲れも忘れ気持よく帰りの列車で歌を詠みたり

七月二十六日

苦しみて耐へて忍びて我慢して必死で生きるこの夏の日を

歌だより (澤部壽孫兄宛・十一月七日)

突然の入院加療と相成りぬ心整ふいとま無きまま (十月二十五日)

つきむとするいのちを惜しみ真夜中に大声上ぐる患者の想おもひよ

凄まじき救急病棟に思ひけり歩める我はまた幸せと

一般の病棟に移り八日経ち微熱も下りややに安堵す

食の間に昼寝すれども眠たきは耐へに耐へたる夏の疲れか

発熱の確たる原因不明にて明治節まで加療を要すと

国護り弁論大会（二月十一日、紀元節）

すめく
皇国を護りぬかんと訴へる若き友等の熱き心よ

いや
礼をして手ぶり豊かに語りゆく国の護りは我に任せよ

久々に浪花の友と会ひて酌み元氣貫へば夕べ楽しき

皇国の生れし佳き日に寄り集ひ浪花の友との宴樂しも

来む年の紀元節の日も相集ひ酌みて語らふ約束をする

心知る友との集ひは楽しくて手造り料理に舌鼓うつ

「坂東・三十三巡礼ツアー」（二月二十日）

たいぼく
千葉寺の大木根を張り巡らせて千三百年の歴史誇るも

をちここに昨日の雪の残りたる市原の街バス進み行く

かけぞかいだん
なだらかな懸柵階段登りゆきはるかに見下す白き樹林を（笠原寺）

国会予算委員会TPP論議を拝して（三月八日）

予算委にて繰り返し応ふる安倍総理「聖域ありの協定」なりと

高齢化を阻止し得ざれば我が国の蘇る日あらず対策急げ

我が国の農産物の品質は優良ゆゑに負けじと思ふ
安倍首相自信に満ちて国会の外交難問論破しにけり

陽春・河津桜咲く（二月九日）

いつ咲くと日を追ふことに気をもみて河津桜の蕾を眺む
春の陽に気温もあがり我が庭の河津桜の咲く日は近し
早咲きの河津桜の花開く我妹とともに待ち詫びをりしに
我が妻の水やり肥やし手塩かけ愛づる桜の花開きたり

朝鮮半島米韓演習（三月九日）

米・韓の北に備ふる訓練に近代兵器の目立ちたるかな
ならず者休戦協定破棄すると告げて脅す朝鮮半島を
いたけだかに我儘世界に通さんとする金王朝はならず者なり

透析治療二年目・百五十回数ふ（三月十日）

透析を始めて一年経ちにけり喜寿から米寿への希望をのせて
四月より透析日程変更され月・水・金の昼四時間となる

三時間・三時間半四時間と増せども透析は命の綱ぞ
このひと年ひと日も欠かさず治療受け心身ともに元氣はつらつ

五月三十日

毎々の短歌通信有難し同志の消息詳らかにして

体調の優れぬなかで編み給ふ短歌通信永きに亘りて

この後も歌を詠みゆく楽しみを共に味はひ励みゆきたし

慰霊祭献詠歌（九月二十三日）

コオロギの嬉々たる鳴き声聞え来て真夏日は過ぎ秋訪れぬ

取り戻せ皇国の総力傾けて世界を動かす日本の明日を

十月二十八日、秋風を感じて

秋立ちて体力戻り透析は二百四十回を数ふる今日よ

妻や娘に心配かくる吾なれど透析続け元氣を保たむ

ひんやりと心地よろしき朝なれど風邪ひかぬやう氣をばつけなむ

秋たちて朝の目覚めのさはやかに夜の眠りも深くなりたり

大君は健やかにいますと報せくる友のみ歌をよめば嬉しき（澤部兄の皇居勤勞奉仕のお歌）
畏くも傘寿を迎へ給ふ大君の御背中になじむか苦難の日々は

旭友会（アサヒ社のOBの集ひ）にて喜寿の祝ひを受く（十一月二日）

つとめたる会社の仲間と打ち揃ひ喜寿の祝ひを受くる喜び

戦友と呼べる三十三名と懐かしむかな勞苦の日々を

記念品の目録に添へオメデトウの社長の言葉を聞くは嬉しき

スカイツリーとアサヒ本社の美しく並び立ちたる置時計なり（記念品）

喜寿は越え米寿を目指し歌を詠み心豊かに日々を過さむ

小懸一也先輩の卒寿を上村和男さん、澤部壽孫君と祝ふ（十一月十日）

冬晴れの心地良き日に我ら集ふ新宿駅前「日本海庄や」に

小縣先輩上村理事長澤部君すでに来たりて座し語る見ゆ

刻内に揃ふを見れば友皆の弾む心の伝はりて来る

先輩の卒寿を祝ひ杯を上げ乾杯叫ぶひととき楽し

にこやかに笑み語ります先輩の御顔仰げば喜びに満つ

旨酒に酔ひ給ひたるやいつもよりご機嫌麗しき上村先輩

久々に友らと酌みて語らへば心足らひて力漲る

新宿の人ごみなかを心足り歩めば豊かに秋の陽の射す

天皇誕生日（十二月二十三日）に

日の丸を揚げて祝ふ御生まれ日の朝冷え冷えとときはやかなりき

集ひ来し数多の民をねぎらひてみ言葉を賜ふ我が大君は

寄り添ひて支へ給ひし妃殿下に深き感謝のみ言葉宣らす

国民には難き日なりしとしみじみと六十年前を語り給ひぬ

安倍総理靖國神社に参拝す（十二月二十六日）

年の瀬に総理とつぜん靖國神社に詣で英霊ををろがみ祀る

戦なき世を祈りつつ英霊らををろがみまつりし総理なるかも

政権を取りてひと歳経たる日に靖國神社に詣で給ひぬ

英霊に頭を垂れてをろがめば痛恨の極みの想ひ晴れけむ

日の本の指導者として確固たる想ひを世界に示せし総理

一点の曇りも無しとつつましく礼儀正しく語る総理は

平成二十六年

伊勢神宮に参拝す（二月八日～九日、小縣一也先輩、澤部壽孫君と）

瓊林の友と旅ゆくお伊勢参りを壽ぐごとく白雪の舞ふ（瓊林会とは長崎大学経済学部同窓会）

指定席に語らひ我妹のさしいれしオニギリ食みて我ら旅ゆく

春先の雪は小雨に変われども夕べ静もる伊勢のみ社

亡き大人と伊勢神宮に詣でたる時にも小雨ふりしを想ふ（星野貢先輩）

伊勢志摩のお湯に浸ればいつしかに旅の疲れも失せる心地す

ホテルにて友等と共に杯を挙げ雨の旅路の疲れを癒す

大雪と小雨に遭ひし旅の宵の料理食みつつ語らふ楽し

荒波にしぶきを挙ぐる夫婦岩を風に吹かれてをろがみ祀る

内宮の御朱印頂く折に聞く今日の参拝者は五万を数ふと

古に想ひはせつつ正殿を心を込めてをろがみ祀る

瓊林の先輩・後輩との初旅は恙なく終ふ神の守りに

『お別れ会のDVD』三月二十八日、泉憲行君への便りに、

み友らの君を讀ふるみ言葉の活き活きとして胸に迫り来

益荒男の君に届けと我が想ひのかぎりを尽し歌を詠みけり

先逝きし君を偲びてこもごもに友等語れば悲しみの増す

君偲び奥様御子らの君偲ぶみ言葉深く胸に沁み来る

先逝きし浪花の友のみ心を偲び止まらずも夢にあらずや

四月一日、浜田清兄の奥様より満中陰法要の御挨拶を頂戴して

折々に我を励ましくれし君先逝き給ふ悲しからずや

寿命尽き先逝き給ひし益荒男の健やかなりしみ姿浮ぶ

君と共に無理を重ねて我が病重くなれども悔いは残らず（大阪支店長時代）

吹田にて君と撮りたる写真を見れば生き抜く勇氣出で来る

アサヒビールの歴史を刻む先人の石碑は立つ吹田の杜に

大先輩も同期生も共につとめたる吹田の記憶は新鮮なりき

「おもてなし」の心満ちたる吹田の杜に益荒男の君今祀らるる

御両親と御兄弟と共に君もまた吹田の杜にまつられにけり

四月十日、奥村浩章氏への便り

君逝きし今年の春は満開の桜を見ても寂しかりけり

足腰の衰へとみに激しくて両膝をつき起き上りけり

おかうし
岡潔先生を慕ふ若きら語ります熱き想ひを聞けば嬉しき

うし
奥村さん佐伯さん語るこもこもに大人を偲びて熱き思ひを

六月十九日、退院

雑菌に冒され腫れし左手の痛みに耐へし日々終りけり（六月十九日、退院）

もう駄目かと思ひし時を乗り越えて迎へし我が家の朝嬉しき（六月二十日）
あした

湯河原への三人（小懸先輩、澤部君と坂東）の旅（七月二十六日〜二十七日）

駅頭の暑さと熱気に耐へきれず約束前の電車に乗り込む（東京駅）

我が妹は我が約束を気にしつつ再三問ひ来る「連絡は？」「座れたの？」と

東京の猛暑に比べ湯河原の風爽やかに心地良きかな（湯河原の駅前広場にて）

露天風呂に友らと浸り憩ひつつ蝉鳴く声に耳を傾く

久々に冷えしビールに杯を上げ櫃ひつまぶし食み語らひ合ひぬ

来む冬に再び訪ひて湯を浴びて梅を愛でつつ酌みたりみて語らむ

この秋に心の通ふ三人して青森の師と奥入瀬おいらせを訪はむ

闘病歌―終戦記念日に思ふ

難き日々偲び給ふる大君のみ言葉聴けば胸つまりくる

安倍総理の言葉を聞きつつ終戦の日々懐かしく思ひ出さるる

靖國に参らぬ総理は英霊に心をこめて詫び給ふらむ

み戦の終りてはやも六十九年経ちていよいよ世はくだちゆく

父母はすでに旅立ち妹も逝き往時を偲ぶ人の少なき

逝く夏を惜しむが如く法師蟬の鳴く聲聞ゆ秋立つらしも

秋立つと思ひたれどもいと暑き日々の続きて耐ふるこの夏

猛暑日に西瓜を食めばひんやりと口に涼しく安らぐ心地す

寝不足の夜の続きし日も終りゆつくり眠り秋を迎へむ

透析に耐へて気力の湧き出でて食欲増せば有難きかな

慰霊祭献詠歌（九月二十三日）

新しきリーダーのもと合宿に百八名のますらを集ふ

難きこといやつき起る世にあれど一人になるも戦ひ生きむ

十月十五日〜二十二日まで心臓のカテーテル手術にて入院す

残されし冠動脈の詰まりしを医師くすしの見つけ手術と相成る

丸三日昏睡の後四日目に冠動脈の生き還るを知る

手術後は胸の痛みと息切れも失せ健やかな我れ甦る

畏くも我が大君もカテーテルを入れ給ふと思もへば力湧き出づ

大君の辺にこそ死なめ生き抜きて世のため御国のために尽して

皇居勤勞奉仕の話を聞きて

合宿に学びし友らつどひ来て宮居の庭につとむるたふと

九州ゆ富山ゆ友らも加りて宮居の庭につとめますとふ

妹・淳子、九州より上京し、在京の妹と三人で語らふ

父母の在りましし日の健やかなみ姿偲び妹らと語らふ

過ぎ来せる歲月偲び折々の想ひ出話に心なごめり

来む秋も元気に会ひて若くして逝きし妹を偲び語らむ

弟も加はり四人の揃ひたる樂しき宴を今より待たむ

十月二十八日、白内障手術のため眼科に入院す

生き延びる想ひの強さに意を決し白内障の手術に踏み切る

本を読む楽しさふたたび味はへば生き抜く気力も戻る心地す

この我を励ますごとく美しき富士山かなた聳え立つ見ゆ

合原俊光君上京す（十一月一日）

若き日に瓊たまの浦曲うらわに縁得えにして友と酌みたる日々懐かしき

我が友と古事記・万葉ひもときて太子の御本も共に学びし

岸本弘君より『朗読のための万葉集古義』を頂きて（十一月五日）

万葉の歌に伝はる日の本の心を今こそ取戻したき

妻と娘と紅葉を楽しむ（十一月十八日）

東京の真中に盛るもみじ葉を観つつ家族と過すひととき

坂道を登りて下る道すがら史跡に見ゆる紅葉麗し

さまざまの気配り工夫あふれたる誕生祝ひの食事楽しも（十一月二十五日）

不自由な指かへりみず手作りの弁当わぎつくるわいじ吾妹愛しき

高倉健逝く（十一月十八日）

ますらをの義理と人情忘れずに生きし俳優逝けば悲しき

アサヒビール「飲んでもらいます」の名せりふ心に響き売上げ伸ばす（昭和四十六年）

ますらをの心あふるる健さんは文化勲章に相応しき俳優ひと

友の旅立ち（十一月三十日）

年の肇に続き再び友逝くの知らせ悲しき師走の宵に

この年は悲しき事の続きたる年と思へば心重しも

山本博資さん宛―文集「皇居の勤勞奉仕に参加して」の礼状に添えて―（十二月一日）

合宿で学びし友らもつどひ来て皇居の掃除に励む尊さ

年末の歌

たかじんに健さん文太と我れ好む人ら彼岸へ急ぎ旅立つ

スマートホン・スイカにスタップカタカナの文字のみ目立つ先進技術は

消費税の値上げを延ばし国民の信を問ひたる与党勝利す

就任ゆ五十ヶ国を訪れて自信に満ちる安倍総理はも

七十年縛られ続けし憲法を改むる時つひに来たれり

念願の憲法改正速やかに行ひ国の大本糺せ

墓穴掘り選挙準備の整はぬ野党各党見るも哀れなり

辛き年も残りわづかとなりたれば逝きし友らを静かに偲ばむ

来む年は逝きし友らのころざし胸にぞ生きむ思ひ新たに

冬晴れの朝あしたに祈る常永久とことはに我が大君の弥栄いやさか続けと

日の本の国柄こそが理想なりと我が大君は述べ給ひけり

他の国の嫌がることも堂々と述べ伝ふるが外交の要諦もと

中條高德大先輩を偲びて

厳しかる導き賜たまびし恩人の旅立ち悲しき年の暮れかな

老いませど車椅子にて健やかに活躍し給ふみ姿うつつに

若者に諭すが如く激動の昭和の御代を語り給ひき

「袖擦り合ふ縁えだじ活かせ」と柳生家の家訓を引きつつ導き給ひぬ

いと熱き大人うしの思ひに奮ひ立ちアサヒビールの生れ変わるも（昭和五十七年二月）

新潟支店の祝勝会に奥様と来給ひし御姿みすがた我れ忘れめや（昭和六十年）

大人うし囲み月岡ホテルに集ひたる彼の日の笑顔あがほ忘れ難きに（昭和六十二年）

折々の歌

五時間の透析のあひま箱根路に挑む若人をテレビにて観る

長男と娘の婿みたりと三人にて今年の抱負を語り合ひたり

一月十二日・成人の日に

冬空に浮べる半月つきを仰ぎつつ日の丸掲げ祝ふ今日かな

思ふがままに（二月一日）

寒入りの明けむとすれどいよいよに寒さ厳しき朝あしたなりけり

吾が生命いのちいつまでも続くかこの朝もやつとの想ひで顔を洗ひつ

透析に向ふ途中の自販機の汁粉の缶に手指ぬくむる

何人も成し遂げ得ざりし優勝を三十三回果せり白鵬

相撲ファンの応援を受けて十五日間欠くることなく満員御礼

新記録・六十一本の懸賞金は全勝優勝に花を添へけり

白鵬に負けし大関稀勢の里前半戦のつまづき痛し

日本人の人質を殺し脅迫し追加要求すイスラム一派は

イスラムのテロの行為は無法にも残虐非情な仕打ちなりしも

平成二十七年

痛恨の極みと総理声絞り悲痛な覚悟に心境吐露せり

短歌通信第百号を拝受して

青関連絡便の歌をよみて

青森ゆ待ちにまちたる歌一首舞ひ来たりけりと詠みましし大人うし（寶邊正久さんのことを）

橋本公明君のお歌を読みて

鹿兒島かごしまの味はひ深き焼酎に賑はひにけむ君の新年

葦牙寮卒業生の集ひの歌をよみて

杖つきて現はれしとふ石井（真徳）兄のみ姿浮べば懐かしきかな
哲太郎に数馬に矢太郎の名を聞けば若かりし日のよみがへりくる

筑豊短歌の会の小野吉宣兄のお歌を読みて

友ら来ぬ短歌の会をルーの無きカレーに例へる歌面白き

今上陛下いまめろぎの「鎌をあてがふ」の御製よみ今年の決意を述ぶる友はも

東京短歌の会の歌をよみて

ブラジルの子らも皇居に旗を振る一般参賀の我が目に浮ぶ（金澤仁子きみこさんのお歌）

新たなる神社の力を得むとする友らの御苦労いたつきたふとかりけり（島津正数さんのお歌）

忙しき日々をおくれる島津兄の奥様いもと連れ立ち美術館に憩ふ

鎌倉の円覚寺にて輪読する友らの姿を偲ぶひととき（『名歌でたどる日本の心』の輪読、関口靖枝さん主催）
をちこちの歌の会にて詠まれたる歌あまた載る通信百号

北南西に東に友らよむ歌こだまする次号待たるる

青森行きの日程を澤部壽孫君から聞きて（二月十日）

嬉しげに旅の日程知らせ来る友のみ声の耳にはじけり

青森への旅を企てくはたたちまちに手配を終ふる友に驚く

久々に長内大人うちしに会へる日の間近に決り心弾むも

新緑の映え満開の桜咲く青森の地を想へば樂し

爽やかな皐月の空を青森へ旅行く日に向け体調みを整へむ

ありのまま我れの思ひを綴りたる拙文へのご指導有難かりき（山内健生編集長のことを）

巻頭言を書き終へし夜は熟睡し朝の目覚めもいと心地良き（月刊『国民同胞』）

書き終ふるまでの食事もそこそこに精魂込めし巻頭言に

友の会会報第89号に多数の同期生の文章を拝読して（四月五日）

我が友の描きし「藤棚」美しく表紙を飾る89号（中村卓也兄）

還曆を迎ふればすぐ友の会に入会せよと友の勸むる（小川渚会長の巻頭言）

友の会に尽し給ひし先輩の在りましし日のよみがへりくる（梶原良平先輩）

民間より公務員への「天上がり人生」体験いと面白し（関曉夫兄の文章）

我が友の推薦^{すす}むる書^{かみ}を我がいのちつきるまでには読み終へんと思ふ（小淵繁利兄）

う孫連れニューヨークの街のをちこちを旅ゆく友の姿浮び来（伊津野平兄）

知覽特攻隊の漢詩を詠みて最優秀賞^{たいしやう}を得たる友はも我らが誇り（阿部清澄兄）

美しき日章旗を詠ひたる君の賀状を我は忘れじ（同右）

友の会の歌にと載りし面白き「ボケない小唄」を我もうたはむ

折々の思ひを込めて投稿を続けてゆかむ「友の会誌」に

九月一日、御殿場にての全国学生青年合宿教室宛に

学生の数は少なくなりましたれど思ひの深さに合宿続く

遺 文



(平成3年 厚木合宿導入講義)

時流に勇氣ある發言を（昭和四十年十二月十日号『國民同胞』所載）

最近、日韓問題をめぐる国会の動きがもつともぎやかな話題を呈してゐるやうですが、これに関してやや一方的な論調が幅をきかせてゐるやうで氣になります。なるほど「ケンカ両成敗」論も「議會政治擁護」論も一応の筋が通つてゐるやうにみえますが、本質的には問題の根本に触れてゐないやうに思ひます。そして今日の特徴がこのやうな「マアマア」論で日常の問題を中途半端にしておく風潮のやうです。このマスコミ界に於ける不明朗さのためにも多くのことが明解な解決をえないままに放つておかれてゐるかと思ふと、だまつて座視しえない氣持ちです。

何故なら今回の日韓問題にかぎらず、こと外交問題に関するかぎり、事々に与野党が真つ向から対立してゐる我が国の現状に於ては、「話し合ひ」に基づく本来の意味の「民主主義」は存在しえぬと断言できると思ふからです。そもそも「議會制民主主義」は最終的には多数決の原則を尊重することによつてのみその存立が認められてゐることを認識することが先決でせう。それなのに「絶対阻止」といつた大方針を当初からふりかざしてゐる政党が現存する以上、与野党の激突が起るのは当然の結果と云へませう。つまり、「議會制民主主義」は話し合ひで妥協点をみつけることを本質とした制度で、「絶対云云」といふことの考へられない政治制度なのです。従つて、本心から「議會制民主主義」を育成してゆく氣持ちのある政党であれば、「慎重審議」と称する議事引き延ばしや「牛歩投票」等によつてではなく、堂々たる論陣をはつて、その争点を明確にすることによつて、たとへ現時点では数のうへで決着がついたにしても、適切な批判を加へることによつて次の機会には大幅な飛躍を期待する方向をとることと思はれます。

しかるに大かたの紙面に於ては、国会混乱の責任の大半が政府与野党の態度にあるかのごとくに傾いてゐるのは肯

けません。これこそ最も一般読者から強く指摘されなければならないマスコミ界の弊害だと思います。確かに、嵐のやうに吹き荒れる戦闘的な論調の中で、ジツクリと落ち着いた主張をすることは非常な勇気を必要とすることですが、本当の意味での民主主義を育てるためには、今日のマスコミ界にみられる調子のよい迎合的な論調に徹底的に本質的な掘り下げを要求しなければならない時期だと思ひます。

英国の歴史を見るまでもなく、「議會制民主主義」の道は辛抱強く育て上げねばならぬ制度でせう。我々の勇氣ある発言によつて、本当の意味での「民主主義」——お互の立場を信頼し、理解しあひ、妥協点をみつけたす努力をす——を育てるやうに努めなければならぬ時期だと痛感致します。(昭和36長崎大卒、朝日麦酒(株)勤務)

日本人として忘れてはならないこと——高校生の娘に——(昭和五十九年六月十日号『国民同胞』所載)

文子ちゃん。高校の制服姿も板についたね。東京古川橋病院で江里口先生にとりあげていただき、明治天皇の「みじかくてことの心のとほりたる人の文こそ読みよかりけれ」の御製の「文」を名前にいただいた文子。幼稚園児の頃から、福岡の油山での慰霊祭に毎夏参加させていただき、小さな掌を合はせて祈つてゐた君。仙台に移つて街角でみられる北方領土返還の立看板や集会の呼びかけの中で育つた君がもう高校生。日本の首都で生れ、南と北の代表的な土地で育つた君と、今日は、日本に距離が一番近く、情報は一番遠い隣国ソ連についていくつかのことを考へてみよう。

① 五月十日の新聞はソ連のロス五輪不参加問題をとりあげてゐた。中でも朝日新聞は一面トップに、『米ソ関係また暗雲』『米が憲章侵犯』とかかげ、中見出しで「反ソ活動監視に反発」とあたかもソ連の不参加が米国の

せぬであり、反米世論を煽るやうな調子で報道してゐる。一国のオリンピック不参加がはたして一面トップを占める程の大事件であるかとの疑問をお父さんは持つ。この日、国際記事で注目すべきものは、「ペルシャ湾でサウジ籍タンカー炎上」や「サハロフ博士夫人警察当局自宅に軟禁」の方がもっと重要に思へる。何故か日本のマスコミはソ連に関した記事の取り扱ひ方が不自然だ。

② 次は記憶に新しい大韓航空機撃墜事件。昨年九月一日夜帰宅した時、お兄ちゃんと君から興奮した口調で、「韓国の飛行機がソ連領空で行方不明になった」と聞かされ、お父さんは即座に、「撃墜されたんだよ」と云ひ切つたね。「何故なの」との間にソ連の体質と国際社会の冷厳で複雑な世界を話したが、事件の詳細が判明するにつれ、世界の緊迫した実態と、ソ連の身勝手な開き直つた主張が明らかになり、その責任すら取らうとしない事実。

③ 日本人の食卓を飾るサケ・マスが、日ソ漁業交渉で年々削減され、今年はずひに四万トンにされたうへ、福島県の小名浜港までソ連の漁業基地に供されてゐる事実。

④ 青森県の航空自衛隊三沢基地から発進する緊急スクランブルが、通算千回を超え、今年だけでも五十五回も数へてゐる事実。

⑤ まして絶対に忘れてはならない事実は、長崎に原爆が投下された日、即ち昭和二十年八月九日の未明、日ソ不可侵条約を破り、突如日本に攻め込み、戦勝国として、国後・択捉・歯舞・色丹の北方四島を不法に侵略し、軍事基地化してゐる事実。

数へ上げればまだまだ指摘出来るが、事実としてみれば、いづれも理不尽なことが、今の日本のマスコミ・教育界

では、なぜか大きな声となつてゐないことの不自然さをもつと考へてみたい。

ここで東北で育つた君にもう一つの話。先日、青森出張の折の感動を話さう。青森市郊外の幸畑まちはたにある公園墓地を訪れたとき、満開の桜のもと御製の刻まれてゐる碑をみつけた。その碑には、明治天皇の「埋火にむかへど寒しふる雪のしたにうもれし人を思へば」と昭憲皇太后の「うづもれし人を惜みて青森の雪をいかにといはぬ日ぞなき」の二首が刻まれてゐる。訪れる人も居ない静かな墓地だが、百九十九の墓石の中心にあるこの碑を前にして、明治三十五年当時の日本の国情に思ひをよせ、何故明治維新後間もない日本が世界に躍進していったのか、その当時の皇室と一体感を共有した日本人の瑞々しく燃えるやうな姿を感じ、しばしたたずんだ。多分学校では習はないだらうが、この墓地には明治三十五年一月、耐寒訓練のため八甲田山への雪中行軍で遭難した青森第五連隊の将兵の霊が祀られてゐる。日清戦争後、三国干渉にあひ、日本は南進に積極的なロシアとの交戦が避けられない状況下にあった。日本は寒中装備も不十分で、厳寒の地での戦闘もまったく未経験であつた。(この間の細部は新田次郎氏が『八甲田山死の彷徨』として小説に書いてゐる。)

お父さんが今一番強調したいことは、一見無事平穩にみえる毎日の生活も、自分や、父、母だけの力で送れるのではなく、自分の任務を自然なかたちで一つ一つ遂行してきた、尊い祖先の生命の積み重ねで日本の国柄が守られてゐるお蔭であることを決して忘れてはならない。

君も、まだ幼い弟妹達に、ことある毎に歴史の事実を正確に伝へ、自分の生き方に活かして欲しい。(アサヒビ―

ル(株) 仙台支店次長)

最近思ふこと―教育の目ざすものを明確に―（昭和六十年五月十日『国民同胞』所載）

注目の臨教審の第一次答申は六月下旬に提出されることだが、この度、審議経過の概要が公表された。発足当初から予想されたことではあるが、公表された審議過程をみる限りでは、残念ながら現下の教育界の混乱・荒廢を糺すにはほど遠いと感じた一人である。

本紙第二七六号の巻頭言で、小柳陽太郎先生が指摘されてゐる如く、「教育基本法の精神にのっとり」諮問されてゐる限り已むを得ぬこととはいへ、いささかでも世の心ある人の琴線に訴へる答申がなされることを切望してゐた日本国民の一人として残念に思ふ。

ここで、最近私の身辺に起つた卑近な事例から、今日の教育界にもっとも必要なものは何かを考へてみたい。今春、隣国の台湾・韓国を旅行する機会をえた。その際、両国で強く印象に残つたことは、案内のガイド氏（いづれも現地人）が流暢な日本語で説明してくれ、敬語を巧みに駆使し、実に正確な日本語を話すことだった。と同時に、日本の歴史・伝統に非常に関心をもつてをり詳しく勉強してゐることに驚かされた。彼等の話の中で、日本の天皇に対する尊敬の念が折にふれて語られることに大変心うたれた。中でも、台北の故宮博物館観覧の際、「世界で最も大きい翡翠の衝立は、戦時中一時日本に持ち出されたが、今上陛下の『元の所有者に返還すべき』とのご発言で、故宮博物館に収まつてゐる。これは天皇陛下が無私無欲のお方だから。」との説明を受け、日本人としての面目をほどこした気持ちになつた。

又『高雄の壽山公園も元々は高雄神社として今上陛下の大御心で建立されたもので、その精神を大切に保持してゐる』等々の話を聞かされ、外国での、皇室に対する評価が高いことに意を強くした。

偶々、名越三荒之助氏の「反日国家日本」（山手新書）を手にし、随所に、外国での日本を称へる事例に接し、日露戦争から大東亜戦争に至る日本の行動に対する外国の見方、特に欧州の白人支配に抗して、東亜の小国日本が立ち向ったことに対する評価が高いことについてもつと注目しなければと感じてゐただけに、日本での皇室に対する教育界・マスコミ界の取り上げ方に不満を感じてゐる。

次に、四女の入学式に参列した妻の話を紹介する。

横なぐりの冷たい雨が降る四月五日、四女の入学式が新潟市立青山小学校で挙行された。その夜、当日の式に娘に付き添つて出席した妻がびっくりした様子で話した。「壇上には『日の丸』の旗が掲げられ、ブラスバンド部の生徒達による国歌『君が代』演奏。コーラス部員と出席者全員による国歌斉唱。新一年生の娘も一生懸命大きな口を開けて歌つてゐた。（娘の幼稚園では運動会等で国歌を斉唱してゐた）今迄子供達の入学式・卒業式を何回も経験したが、小学校の入学式で国歌を斉唱したのは初めてだった。校長先生は小さな一年生に、『して良いことと、悪いこと』の区別をかみくだくやうに話をなさつておいででした。前日の始業式にも、三女をはじめ転入生四十名全員を、在校生に一人一人紹介し、『暖かく迎へ、いじめのないやうに』と話をしておいででした。上に立つ人によつて色々と違ふのね……。」と。

昨秋の転勤以来、単身赴任生活を送つてゐた私は久々に子供達の学校の様子を聞き、四女が恵まれた学校に巡りあへたことを心から喜んだ。五番目の子供の入学式で初めて本当の教育現場にふれた思ひがする。

だが、はたしてこれで良いのだろうか。偶々四女は好条件に恵まれたにすぎぬのではなからうか。幸ひに、七人の子供達は今のところ大きな問題を起さず成長してゐるやうだが、偶々恵まれただけに終らせたくないとの思ひに

かられてゐる。

以上、私の周辺に起った小さな事例の中にも、今の教育現場の糺すべき問題点が大きく浮彫されてゐるやうに思へる。一人一人の気持ちを奮ひ立たせ、日本の国柄を守り抜くことの大切さは論をまたぬが、国家として、教育の目ざすべき方向を明確に示すことが、諸問題解決の根本と考へる次第である。(アサヒビール(株)新潟支店長)

楽しき哉！「敷島の道」(平成三年八月七日、第三十六回全国学生青年合宿教室(厚木)の合宿導入講義)

目次

はじめに

出会い—おもふこと思ふがままに—

会社生活—天職の歌—

一人では生きられない

娘の命名

幼稚園の学芸会

父逝く

終りに

はじめに

皆さん、今晚は。(こんばんはの返事あり) あっ !! 返事がありますね。これは嬉しい。なぜか最近は、「お早うい

「ございます」と言っても返事をしない人が多いですよ。幸先の良い「今晚は」の返事に「ありがたう」とお礼を言ひます。

改めて自己紹介を。私は、昭和十二年生れで五十五才。家族は、妻と、二人の息子、五人の娘、計七人の子供がゐます。子供数では会社ではナンバーワン。私の誇りです。アサヒビールに入社以来営業畑一筋に三十年。昨春秋関連会社のアサヒビール飲料㈱の役員に就任。

昭和四十七年第十七回阿蘇合宿で運営委員長を務めて以来二十年ぶりの参加です。しかも講義は初めてで、足がブルブル震へ、緊張してゐます。皆さんも合宿初日といふことで相当に緊張されてゐるやうですね。私の役目は、皆様の緊張感をほぐすこと。あとは運営委員長に任せておけば良いと思つて、冒頭の講義を引き受けました。「楽しき哉！敷島の道」などと仰々しいタイトルをつけてをります。「敷島の道」といふ言葉は、五七五七七、三十一文字、短歌形式の和歌のことをいふが、和歌を文芸の一ジャンルとしてだけ考へるのではなくて、「日本人のふみゆくべき道」として考へる場合に、使はれる言葉である。（夜久正雄著『しきしまの道研究』24頁）

私自身の生き方。私の人生。或は言葉を大切に生きてゆくといふ生き方。通ひ合ふ言葉を話しながら生きてゆくことは非常に楽しいといふ意味を込めて、こんなタイトルをつけました。

出会ひーおもふこと思ふがままにー

昭和三十四年、長崎大学三年の夏、第四回阿蘇合宿に参加したが、この国民文化研究会に連なる第一歩でした。今、初参加の合宿教室を思ひ起すと、正面に「日の丸」が飾つてあり、開会式で「君が代」を斉唱。私にとつても初めての経験でした。今日、入口のところに「友よと呼ばば友は来りぬ！」といふ横断幕が飾つてありました。正

面の日章旗をまん中には喜んで、三つのスローガンがかかげられてみました。「混迷の時代に消えざる地熱、祖国のいのち」、「孤立する心を友情交流の世界に投じよう」、「まことの学風をわれらの学園に興さう」

このスローガンをみて、「わあ!! すこい合宿に来たなあ。俺は大丈夫だらうか。最後までもつかない」といふ気持ちになったことを思ひ起します。自分が今迄経験したことのない素晴らしい機会に出会ったんだといふ、大きな感動でした。しかし、今いろいろと思ひ返してみると、私のその後の生活に根づいていったもの、それは初めてふれた明治天皇の御歌を中心とした短歌でした。明治天皇の御歌を唱和してみませう。

をりにふれて

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも（明治四十五年）

書

うるはしくかきもかかずも文字はただ読みやすくこそあらまほしけれ（明治三十八年）

この二首について、私の感懐を述べます。第一首目の歌は、自分の思つてゐることを、思った通りに、歌のしらべになるならないといふやうなことを考へずに、詠んでゆけばちゃんと歌になるといふお気持ちの歌です。第二首目の歌は、文字を書くときは、立派な字を書かうとかそんな気どつた思ひは何も要らない。ただ心から伝はるやうに、相手が読みやすいやうにしていねいに書くことが大切だと。これは、人の心の素直さをそのまま表はしなさいといふお歌で、何と素直な、本当に思ふこと、感じたことを、そのまま三十一文字に記した素晴らしい歌だらうと非常に感動しました。ああ、これなら、感性の鈍い、表現力の乏しい私でも歌を詠めるんじゃないかと感じました。

合宿から帰つて早速古本屋を探し、「明治天皇御集」を一冊みつけて、今日迄三十二年間、毎朝拝誦を心がけてゐ

ます。この経験が私の生き方の一つの原点になってゐます。

会社生活―天職の歌―

三十六年。卒業と同時にアサヒビール(株)に就職。「いづれ日本一のビール会社にするぞ!!」「いづれアサヒビールの社長に!!」との気迫で、青雲の志を抱いて……。勿論経営の中枢に係はるすべもなく、激しいシェア争ひの最前線で、来る日も来る日も酒屋さんを回訪してアサヒビールの売込活動に明け暮れるなかで詠んだ歌。

もう一軒もう一軒と汗をふき歩きまはるか新米担当我は

これは大変な字余りの歌ですね。新人セールスマン時代の心意気を詠みこんだことも、今は懐かしい思ひ出です。暑き日も雪降るときも心こめアサヒビールをすすめすすめし

辛口のビールはアサヒと笑みたたへ店陳棚入れはげむ楽しさ

なんだか宣伝臭の強い歌で申し訳ありません。会社での生活を三十一文字にならべてみては、俺はお国のために役立つてゐるんだと励んでみました。そんなとき「お前の職業は天職だぞ!!」「お前は一生ビール屋として世のお役に立て!!」そんな天の声が聞えてくるやうな歌に出会ひました。その歌は、

酒といふ文字をみてさへ嬉しきに飲めといふ人神か仏か(土井晩翠)

誰あらう、あの「荒城の月」の詩人土井晩翠の歌です。

私の仕事に誇りと自信を与へてくれた三十一文字。毎日、三百六十五日、「アサヒビールを売って下さい」「アサヒビールを飲んで下さい」そして「お役に立ちたい」との私の気持を、これほど素直に、これほど簡明に代弁してくれてゐる歌。自信をもつてアサヒビールを売込むことは、『世のため』『人のため』『自分のため』に本当に素敵な

職業だとの確信に到った歌に出会ひました。この歌は一生忘れません。

お酒に関する歌を、もう嬉しいものばかりですが、紹介しておきます。

人の世に楽しみ多し然れども酒なしにして何の楽しみ（若山牧水）

まらうどよ飛驒は山国風寒し何がなくとも酒きこしめせ（福田夕咲）

全くそのとほりで、世の中から酒がなくなつたら、私はもう死んだ方がまし。

杜氏殿の心澄みゆき魂きはるいのちの甑もこは生れ初めけり（司馬遼太郎）

これは飛驒の洒問屋さんでみつめました。社長さんのお話では、会社の創業記念の折に司馬遼太郎さんにいただいた歌とのこと。『短歌のすすめ』に、古来日本の為政者をはじめ各層の人々は折にふれて歌を詠んでゐたことが紹介されてゐます。日本を代表する作家の司馬遼太郎氏も歌を詠まれてゐるといふのも嬉しいことでした。

明治天皇の御集の中にもお酒の歌があります。

酒

冬の夜の寒さをしのぐ酒だにも得がたかるらむつはものものとも（明治三十八年）

日露戦争の厳しい戦で、寒さをしのぐ酒さえも手に入らないのではないかと、戦線の兵士を思つて詠まれた御歌ではないかと思ひます。

盃

しづかにも世はをさまりてよるこびの盃あげむ時ぞまたるる（明治三十七年）

早く戦争が終り、平和な世にしたいものだ。早くかちどきの盃をくみかはしたいものだ。それを待つてゐるんだ

よ。そのやうなお気持がしんしんと伝はつてくる御歌でございます。

一人では生きられない

現在の私を支へてゐるもう一つの歌。私の生き方の根幹にあつて忘れられない歌があります。これも、合宿教室で巡り合った歌です。

ますらをのかなしき命つみかさねつみかさねまもる大和島根を

心しる友とかたれば心なごみながるるなみだとどめかねつも

この二首とも三井甲之先生の歌です。『短歌のあゆみ』に詳しく載つてゐますが簡単にふれておきます。

一首目の「ますらを」は、日本男子のことです。日本建国以来日本の伝統を受継がうとする男です。「かなしきのち」は国と運命を共にする悲劇的な生命です。建国以来多くの「ますらを」が、そのいのちをつみ重ね、つみ重ねて、この美しい大和島根、日本国を守つてゐる。日本の伝統を受継がうといふ男の悲劇的な生命をつみ重ねてきてゐるのがこの素晴らしい日本なのです。これは昭和二年、演習中に沈没した駆逐艦「蕨」の機関長で、亡くなられた福田少佐を偲んで詠まれた連作短歌九首の末尾の歌と聞いてゐます。二首目の「心しる」の歌は、涙が止まらないといふやうな感動を是非とも経験したいと思はずにはゐられないやうな歌ではありませんか。

昭和四十五年の合宿教室で、小田村理事長が、「われわれ人間は自分ひとりで生きてゐるのではない」といふタイトルで講義をなさつてゐます。その中で非常に印象に残つてゐるお話を、先生のお許しをえて少し披露させていただきます。

私、七人の子宝に恵まれたと申しました。幸に、七人とも母乳育ちです。この世に生まれた赤ん坊が一番先につ

き合ふのは母親です。母親のオッパイに、母親の命を分けて生まれてきた赤ん坊はすぐ吸ひつきまゝ。母親の目をじっと、見えない目で見ます。これが母親と赤ん坊のつき合ひです。つきあひの原点。人と人とのつきあひは、その意志のあるなしに拘らず、赤ん坊が本能的に母親を信頼してゐるやうに、本当にあなたを信頼するといふところからスタートしてゐるのです。

日本で生れた赤ん坊は日本語をしゃべるが、外国で生れた赤ん坊は外国語をしゃべります。私、自分の七人の子供達を見てゐてさう思ひます。

夫婦で話すとき、ちゃんと返事をする、子供は覚えてゐるんです。だから「声」と「言葉」とが違ふのは何故かと云ふと、「声」といふのは音だけなのです。「言葉」といふのは、人づきあひを伝える手段です。伝達の手段であり、また心のこもつたものなのです。だから「太郎ちゃん」と呼ばれたとき、「うん」と言ふのは、これは返事じやなく、相づちをうつてゐるだけです。「はい。何でせう」これが返事です。さうすると心が通ひ合ふんですよ。さう思ひませんか。大事なことでせう。

ちよつと自慢話みたいになりますが、私、子供達に教へられました。そのことをご披露します。子供達がまだ小学生の時のことです。バスに乗つて街に出かけた折、降りる際、運転手さんに、「ありがたうございました」と言つて降りるんですよ。三人とも大きな声でね。私、ドキッとなりました。「ありがたう」の一言が言へないのです。私には出ないのです。バスに乗せて貰ふのはあたりまへ。こちらは錢を払つてゐるのだ。そんな気持があるからでせうか……。 「ありがたう」といふ素直な言葉が出てこない。バス通勤の折に実行してみました。翌日、出ません。「ありがたう」と言へない。一週間位言へない。やっぱりてらひがあるんです。お客さんに恥づかしいのでせうか。「こ

んなところで、大声で、ありがとうと言ったら、又あの野郎格好つけやがって……」と囲りの人がみるんぢやないかと。さういふ心になつてゐるのですね。これがいけないのでせう。で、どうしたかと云ふと、最後に降りるやうにしました。終点でしたから。「アリガタウゴザイマス」最初は小さな声でした。三日目位から声が大きくなり、運転手さんが「苦勞さん」とニコニコして言ふので嬉しくなります。段々自信が出て、一週間たつたら、もう堂々と「ありがとう」と言へるやうになりました。やつと、「ありがとうございました」と大声で言へた時の爽快感は忘れられません。

しかし、この合宿は違ひますよ。講義が始まるときは、「お願ひします」、終つたら、「ありがとうございます」とやるんです。気持が良いですね。けぢめですよ。さういふところから人と人とのつきあひは生まれてくるんですよ。言葉が生きてくるんです。私は、さう思ひます。

「オ・ア・シ・ス」聞いたことありませんか。これは「お早うございます」の『オ』。感謝の気持を込めて言ふ、「ありがとうございます」の『ア』。お詫びの心を表す「失礼しました」の『シ』。謙そんして言ふ言葉の「すみません」の『ス』。これは便利ですから覚えておいて下さい。これ營業用の言葉です。營業ではみんなやつてゐるんですよ。私、非常に大事なことと思ひます。

娘の命名

長女は、国文研の江里口淳一郎先生にとりあげていただきました。その命名の折、

文

みじかくてことの心のとほりたる人の文こそ読みよかりけれ（明治四十三年）

江里口先生からこの明治天皇の御歌を示されました。簡潔で、真心の通った人の文章は本当に読みやすい。素直な子に育つやうにと云ふ意味で長女は「文子」といふ名をいただきました。

その長女が高校に入学した年、「日本人として忘れてはならないこと―高校生の娘に―」と題した私の一文が「国民同胞」五十九年六月号に掲載されました。お手もとのレジュメにあります。最初と最後を読んでみませう。「文子ちゃん。高校の制服姿も板についたね。東京古川橋病院で江里口先生にとりあげていただき、明治天皇の『みじかくてことの心のとほりたる人の文こそ読みよかりけれ』の御製の『文』を名前にいただいた文子。幼稚園児の頃から、福岡の油山での慰霊祭に毎夏 参加させていただき、……」

それから最後の六、七行目「お父さんが今一番強調したいことは、一見無事平穏にみえる毎日の生活も父、母だけの力で送れるものではなく、自分の任務を自然なかたちで一つ一つ遂行してきた、尊い祖先の生命の積み重ねで日水の国柄が守られてゐるお蔭であることを決して忘れてはならない。……」

この中で、ソ連に係わるニュースを五つとりあげ、私が最も力点を置いたのは、「まして絶対忘れてはならない事実、長崎に原爆が投下された日、即ち昭和二十年八月九日の未明、日ソ不可侵条約を破り、突如攻めこみ、戦勝国として、国後、択捉、歯舞、色丹の北方四島を不法に侵略し、軍事基地化してゐる事実。……」これは事実ですからね。この事実を遺言的な意味で高校生になった娘に伝へたかったのです。

その折、江里口先生からお寄せいただいた歌をご披露させていただきます。

忘れぬしその人の名はおぼろなる古きことどもよみがへりつつ

健やかに育ち給ひし夏の日の面影しらず逢はず久しも

「夏の日の面影しらず」と云ふのは、ここに幼稚園のころ油山の慰霊祭に参加して云々といふことを歌つてをられるのです。

嬉しかったことに、『国民同胞』編集長の寶邊正久先生からも歌をいただきました。

いとし子にかたすることは咲く花を待つがごとくに心こもれり

浦安の日の本の民の目の前の虎狼を教ふ君は我が子に

「虎狼」といふのは、ここではソ連のことだと思ひます。

幼稚園の学芸会

子供達とのコミュニケーション、なかなか普段は出来ません。私、七人の子供全員をお風呂に入れました。子供が歩けるやうになると、日曜日は子供を連れて散歩に出かけます。その折、小さい子供達に、やってはいけないこと、守るべきルール等を教へてをりました。「人に迷惑をかけるな」、「感謝の心を忘れるな」、「人に後ろ指をさされるやうなことをするな」と、大体この三つを言つてをりました。先程ご披露したバスを降りる時の「ありがたうございませ」は子供達が、私の教へをキチンと守つてゐるなあと感じ、大変嬉しかったことを記憶してゐます。

ゑみたたへ「もう春ですよ」と喜びを体いっぱい歌ふ吾子はも

くりかへし声はりあげて歌ふかな「ステキな世界子供の世界」

「通りゃんせ」「トッピンシャン」に「村祭り」ド・ドーンとひびく吾子の太鼓は

この括弧でくくつてあるのはみんな歌の題です。幼稚園の学芸会、五女と次男にまつはる歌です。園児たちの演芸

が終ると、その場で、感じたことをちよつと即興的に詠んで、先生に差しあげました。「とつても楽しい雰囲気の歌ですね」と、幼稚園の先生にいたく喜んでいただきました。

父逝く

昭和五十八年九月、私が四十五歳のときに父を亡くしました。七十五歳でした。大変残暑の厳しい年、その折も、先生方や諸先輩、仲間からたくさんのお歌をいただきました。私のつたない歌のみ披露します。

蝉の声なほしはげしき暑き日に父みまかれり笑顔のこして

死に目にはあへぬかもとくみかはせし七年前の宴徳ばゆ

「七年前」といふのは、福岡から仙台に転勤になり、当時は仙台―福岡間の直行便がありません。私が父に、「もう二度と逢へないかもしれないよ」、「仙台に行くのを止めようか」と申したら、「そんなことはない」、「人生到るところに青山ありだ、行きなさい。官仕へをしたら死ぬまで仕へるのが日本人の生き方だ」と諭された記憶がございます。危篤の知らせを受け二度帰り、三度目は、もうこと切れてをりました。私が帰ってくるのを待つてみたかのやうに、デスマスクは笑顔に満ちてゐました。

翌五十九年九月待望の支店長の辞令を拝命。サラリーマンにとって、一国一城の主となることは、何にも勝る喜びです。たった部下十二名、年商わづか五十億足らずの小さな支店ですが、意気込んで歌ひました。

一城の主になれとのたまひし父の遺影に辞令を拝しぬ

必ずや越の国での我が務はたしてみせんと誓ひ新たに

「越の国」は新潟の昔の呼称です。「一城の主」とは大げさですけれども、そんな気持ですね。先程の「飲めといふ

人神か仏か」から約二十年たつてをりました。

終りに

私は子供達には、大学に入ったら国文研の合宿教室に参加するのが学費を出す条件だと言つてゐます。とんでもないおやじと言はれるかもしれませんが、親が生活費をみてゐる間は子供は親の庇護下にあるべきで、これが日本の伝統であり、我々が守つてゆくべき大切なことであると思つてゐます。長男も合宿に参加しました。次女が短大一年のとき、しゃにむに参加させました。中学一年生の三女をアルバイトのお供につけて参加させました。甘い親と思はれますが、何としても合宿を体験させたい。参加すれば必ず役立つ合宿だとの強い信念を持つてゐましたので……。

一昨年の合宿レポートに二人の娘達の歌が載つてゐます。

天皇の御言葉御歌聞きゆかむ心無にして耳そばだてて (恵子)

熱心に講義聞く人聞かぬ人よりどりみどり沢山あるな (陽子)

陽子の歌は参加最年少者の歌といふことで短歌相互批評で披露されてゐたやうです。

心

つくろはむことまだしらぬうなぬこのもの心のうせずもあらなむ (明治二十九年)

「つくろふ」は構へるとか整へるとの意味で、先程のバスの例で引き合ひに出したやうに、疑はしい心を持つてゐることかと思ひます。子供はさうぢやありませんね。生れたときはお母さんのお乳に食らひついて、あの信用し

てゐる心を墓場まで持つてゆけば、世の中のもめ事は起らないのでせうが、なぜかさうはいきません。生れたとき、あの純真なものと心を失はないままであつて欲しいなあといふ明治天皇の御歌です。

最後に、「つきあひ」といふ言葉について、小田村先生からうかがつたことを話します。「つきあひ」の「つき」は、相手と自分がくつつくほどに相手に近づくこと。そして「合ふ」は相手とびつたり一体になること。その真意は、相手の心を慮るといふことなのです。営業の言葉では、「お客さんの立場になる」といふことです。企業では皆やつてゐるのに、日常生活ではなぜ出来ないものでせうか。残念です。やはり、学校教育と家庭教育がキチンとしてゐないせいでせうか。非常に大切なことだと思ひます。そんな意味からも「敷島の道」を学び、相手の立場になつて、言ふならば心を働かせる、この合宿の班別討論は「つきあひ」の基本を実践する場です。班別討論の折には、自分の一方的主張を押しつけるのではなく、相手の立場になつて、「あの人はどう考へてゐるのだらうか」、「僕のことの発言をどう思ふだらうか」、といふやうに相手の気持ちに思ひをこめて発言して下さい。言葉と心の通ひ合ふ道、これが敷島の道と思つてやつてきました。これからもやつてゆきます。

（静聴ありがたうございました。）

『思はむることのおりて……』——阪神大震災が揺り動かした二つのこと——

（平成七年三月十日号『国民同胞』所載）

一月十七日未明阪神地方を襲つた大地震で公私とも大揺れのこの一ヶ月。激震地に営業拠点四ヶ店・従業員百十名を配する企業の現地責任者としての立場で、人命救助・得意先支援・復興立案等に奔走する日々であつた。

この間マスコミは、震災の予知・救援活動の在り方・国家の危機管理体制等々毎日甲論乙駁、まさに百家争鳴を呈してゐる。そのいづれもが現象面の指摘にとどまり、本質に迫つてゐない。種々の見方があるが、戦後放置されてきた大切な事、即ち「東京裁判史観の呪縛」から脱却するまたとないチャンスではないかと思ひ愚考を記す。

先づ一つは、無責任極まる自衛隊批判。「自衛隊は何をしてゐる」「自衛隊の出勤がもっと早ければ」等あひも変らずの論調をくり返すのみで、根源に切り込んだ論議がないのにいささか食傷気味。一番に論議されるべきことは「日本国民は自衛隊を従前どう位置づけてゐたのか」即ち「防衛で国民的合意を形成する」ことが大切なポイントであらう。

確かに村山内閣は第百二十回臨時国会で、「自衛隊は合憲」「日米安保条約堅持」「非武装中立はその役割を終へ放棄」と安全保障政策の歴史的な大転換をとげた。しかし、自衛隊の現実活動を支へる裏づけたる防衛費に対しては、冷戦構造の終焉を理由に、伸び率を〇・九％に抑へ込み、実際上の活動が充分に出来る体制にしてゐない。サンケイは「防衛費伸び率〇・九％になると」と題した主張欄で論じてゐる。平成六年度防衛関係費四兆六千八百三十五億圓中、人件糧食費と主要装備の延べ払ひ分では八割を占め、毎年人件費と駐留費の負担だけで二・八％は確実に増える。従つて〇・九％の伸びに抑へるためには、実際活動を支へる訓練費・施設整備費等三・七％を占めるにすぎない。「削減対象」からほど半分をバツサリと削り込まねばならない。訓練費の縮小を重ねれば、ボディーパーローのやうに効いてきて、自衛隊の根本問題にもかかはつてくる。 (サンケイ六年八月五日主張)

そもそも近代国家の最大の目的は「国民の安全と秩序を保障する」こととされてゐる。その安全と秩序を維持する最大の役目を担ふ自衛隊に対する信頼の裏付たる防衛費の在り方に国民的合意をとりつけることに全力を尽すこ

とが緊急の課題であらう。この際世論も政治もこの問題を真正面からとりあげ、是非とも防衛に関して国民的合意をとりつきたいものだ。

次に皇室について。今年も一月二日は晴天に恵まれ、皇居での恒例の一般参賀に、大声で「天皇陛下万歳」を三唱し、新年への決意を新にした。翌日の新聞報道によると、参賀者は七万一千八百名に過ぎなかった由。初詣の人数が百万人単位で報じられてゐる中で、寂しく感じたものである。原稿執筆の今日、二月十九日は、昭和二十一年天皇陛下の地方巡幸が始まった日で、「敗戦後の廢墟と虚脱のなか、国民の中に進んで入っていかれた昭和天皇のお姿は「人間天皇」を強く印象づけた」との記事が出てゐた。(サンケイ)

今回被災地での天皇・皇后両陛下の被災民への接し方と村山総理のその違ひをみるまでもなく、我が皇室の国民に向はれる御姿勢と御心の深さは感動的である。この未曾有の大災害にあはれた犠牲者の方々のためにも祖霊をお祀りになってこられた皇室のご心痛に思ひを致し一っだけ提案をしたい。即ち、靖國神社への天皇陛下の御親拝をぜひとも実現させていただきたい。昭和天皇が靖國神社に御親拝賜つたのが昭和五十年十一月。それ以後十九年にわたる長い歲月、総計二百四十六万余柱の英霊は天皇御親拝の榮に浴する機会をえられず、神社創建以来百二十五年の歴史の中では異例の初めてのことの由。(『正論』八月五日号 小堀桂一郎先生)「総理の公式参拝問題すらも独立自尊の主権国家にふさはしい解決をつけられずにいる我が国の政府に、天皇・皇后両陛下の靖國御親拝復活を実現すべく八方手を尽せ、と要求しても所詮無理というものである。」(同前出)の通りであらう。しかし、皇太子殿下ご夫妻の中東ご訪問の是非等現象問題を論ずるにとどめず、皇室の最大役割の一つである「祖霊をお祀りになる」ことの大切さを全国民の前に明らかにし、国民統合の象徴であらせられる天皇陛下には、何としても靖國神社

御親拝を復活して頂き、戦後五十年間の太平洋の間に日本国中の到るところに浸透してゐる「東京裁判史観」を克服するきっかけにしたい。

思はざるごとのおこりて世の中は心のやすむ時なかりけり（明治天皇御製）を拝誦して、五千四百人を超える犠牲者のご冥福を祈る。 合掌。
（アサヒ・ビール飲料株常務取締役・近畿圏支社長 数へ五十八歳）

少子化の時流に棹さして

―七人の子供達の義務教育を終へて思ふこと―（平成十一年四月十日号『国民同胞』所載）

「お父さん！サクラ咲くよ！」と妻の明るい声が受話器に弾んだ。次男坊（七番目の子供）が念願の都立西校に合格したとの知らせである。巷間、学級崩壊等荒れる学校の話題が毎日のやうにマスコミを賑はしてゐるが、度々の転勤に伴ふ転校を経験し、多少のトラブルはあったものの、登校拒否生も、グレ者も出さず、七人無事に義務教育を終へることが出来ホツとしてゐる。

「七人ものお子さんを育てるのは大変でせうネ？」度々聞かれた。成長した子供達のアルバムを繙いてみると、一人一人の成長の軌跡に万感の思ひがこもるが、大変だったとの実感は薄い。「ビール会社に奉職したのだから胃袋の増加をはたし会社に貢献する」との世帯を持った当時の初志を貫徹した喜びが大きかったせみかもしれぬ。

「合宿教室」参加の縁で和歌に出逢ひ、『白銀も黄金も玉も何せむにまされる宝子にしかめやも』の山上憶良の気持ちを大切にし「子は宝」と信じたこと。妻が健康で七人全員が母乳で育ったことも幸ひした。子供を育てる一番大切な時期に母乳で子供達を育てることが出来たことを妻に感謝する。

何よりもまして、子育てには本当に恵まれた環境にあったと、以下の方々に心より感謝の気持ちを伝へたい。

第一に三十八年間に亘って仕事に全力投球出来た会社の仲間達。

第二に「ダイヤモンドはなくとも、七人の子宝は素晴らしい」と陰日向なく励ましてくれた双方の両親。

第三には日教組のドグマに犯されることもなく子供達を情熱をもって導き下さった幼稚園・小・中学校の素晴らしい先生方。

私にとって最大の支へは、国文研のご縁で出逢った良き師、良き友の励ましであり、毎朝拝誦してゐる明治天皇の御製の数々であった。

つくろはむことまだしらぬうなぬ子のもとのこころの失せずもあらなむ（明治三十七年 心）

たらちねのにはの教はせばけれどひろき世にたつもとゑとぞなる（明治四十年 庭訓）

この明治天皇の教育への思ひが、人の人たる道をお示しにられた明治二十三年宣布の教育勅語になったと聞く。ふり返ってみると私の子供達への接し方の根幹は「父母二孝ニ、兄弟二友ニ、夫婦相和シ、朋友相信ジ、恭儉己ヲ持シ……」との教育勅語精神の中にその真髓があつたと思ふ。

子供の一番大切な時期を母乳で育て、七人の子供達全員を私が風呂に入れスキンシップを凶つた。朝は「お早う！」に始まり、「行って参ります」、「行ってらっしゃい」、「ただいま」、「お帰りなさい」の挨拶の飛び交ふ家庭生活。

幼いときから散歩の折や、一緒に囲んだ食卓で「人の交りの中で大切なこと」、「やってはいけないこと」、「守るべきルール」を反復教へてきた。「ハイ」と元気の良い返事、「人に迷惑をかけない」、「感謝の心を忘れない」、「人に後ろ指をさされるやうなことをしない」等々と。

更に、日常生活の節目の中で、祝日は必ず日の丸を掲げ、折々に皇居に連れてゆく等、日本国民として恥づかしくない生き方を実践してきたことも忘れられない。

今、学校教育の場で生じてゐる混乱、或は日本のあらゆる社会現象の中で生じてゐる我欲むき出しの事件の大半は、「公」と「私」との混同。家庭や学校生活に於て、基本的なルールが実践されてゐないことにある。「子供の目線」ではなく、古来日本の伝統の中で培はれた「躰」といふ物差でキチンと教へ込み、身につかせることが一番大切なことだと確信する。

日本が成長するに必要な人口、出生率二・〇八%を保持し、個人のエゴむき出しの「私」から「公」の立場をわきまへた子育てをするためにも、「心の教育」を実践するためにも、教育正常化を志向してスタートした本会の最大行事「全国学生青年合宿教室」継続の火を燃やし続けることを決意してゐる。

—平成十一年三月十四日（アサヒ飲料㈱ 常務取締役 首都圏支社長 数へ六十二歳）

著書紹介（平成十三年八月十日号『国民同胞』所載）

中條高德 著『魂を抜かれた日本人』（文化創作出版 定価千五百円）

久々に政治に活気を呼び戻した小泉首相が施政方針演説で、小林虎三郎の「米百俵」の精神を強調し話題になつてゐる。

中條高德氏（本会賛助会員）は『魂を抜かれた日本人』といふショッキングなタイトルの著書で「政治家や教育関係者達に小林虎三郎の門を叩けと叫びたい！」とズバリ喝破。この書に一貫して流れてゐるのは、「自分たち年寄

りは語り部として、自らの体験を次の世代に語り継ぐ責任がある」との日本国への熱き思ひだ。

前著『おじいちゃん戦争のことを教えて』には二千通を超す熱烈な読後感が寄せられた由。その熱き思ひが本書を生み、歴史を彩った数々の具体的事実で読者を惹きつける。又、「今、日本人が気づかねばならないこと」を的確に指摘し、「戦後日本人の誤った『自虐史観』を正し、誇りある日本人として生きるための高い志とは何か」を問ふ警世の書である。

中條氏、昭和二年長野県生れ。陸軍士官学校時代に敗戦を迎へ、突如として価値観がひっくり返り、心に大きな傷を受けるが、安部能成先生との出会ひから学習院大学に学ぶ。在学中、全国大学生論文コンクールに応募し、「国民生活に於る人件問題を論ず」のテーマで、総裁賞の荣誉に浴した文才は、随所にその片鱗がうかがはれる。

氏は、現憲法の問題点を、「あまりにも『個』が優先し、『公』の側面が欠落していることに尽きる」と論破し、「八月十五日は敗戦の日で『撃ち方止め』の日にすぎない。国際法上の終戦は、サンフランシスコ講和条約が発効した昭和二十七年四月二十八日」「国民が不利益を受けるような法は、憲法といえども変える勇氣こそがはるかに尊い」「憲法前文のおとぎの国の物語のようなことを叫んでいるだけではナメられることはあつても尊敬はされない」「日本の若者が、二十一世紀に夢を持ってなくなったのは、自信を持って躰をしなかつた親の責任だ」等々昨今の風潮に大胆に切り込み、自立の精神がなければ日本を真に立て直すことは出来ない」と主張する。

更に、「マッカーサーとGHQの巧妙な占領政策即ち『精神的カルタゴ』政策が、神道・国旗・国歌・旧憲法の否定であり、天皇の否定こそ、『日本人の魂を抜く』作業だった」と論点を明確にする。

これを克服するには、「外患よりも内患によって国は滅びることを歴史の事実で学び」「自分の国に誇りを持ち」

「志高く生き」「公に奉仕する心を養う」ことだと、数々の事例を挙げて、日本建て直しのための精神的処方方を明示してゐる。

孫娘とウイーンのシェーンブルグ宮殿を訪れ、質素だが歴史ある我が皇室と派手で短命な外国の王室との差を指摘するシーンは、具体的で若者にも解り易く説得力充分。「皇室は権力者ではなく、神の祭祀王であり、謙虚で質素で信仰も厚かった。仕える神々はそのまま、国民の神々であつた。国民を支配する王ではなく、国民と共にある天皇であつた」と。

「志高く生きる」ことの素晴らしく大切なことを強調し、凋落のアサヒビールの営業本部長として『アサヒビール生まれ変わり作戦』の指揮をとつた経験を熱く語る。「指揮官が志を立てることは、国を思い、組織を考え、命を投げ出してでも達成すべき目的のために、その礎となろうと心ざす情熱であり、心意気だ」『ビールは生で飲むのが一番うまい』との信念を訴へ続け、その熱き志が『スーパードライ』となつて結実し、遂にキリンを抜いた。『常在戦場』を反芻しながら共に闘ひ抜いた戦友であり、直接にご指導を仰いだ師だけに数々のエピソードとその背景がつい昨日のことのやうに臉に浮んでくる。

(アサヒ飲料株顧問 本会理事 数へ六十五歳)

新刊紹介 (平成十五年七月十日号『国民同胞』所載)

痛快なる憂国警世の書

林秀彦著『悲しいときの勇氣―日本人のための幸福論』(明星社 千六百元税別)

十五年前、オーストラリアに移住した著者は、かつて映画・テレビのシナリオライターとして活躍してゐた。「た

だいま十一人」「七人の刑事」「鳩子の海」等々のシナリオ作者であったと記すと懐かしく思ひ出される読者もあることと思ふ。

遙かオーストラリアの地から思ひを馳せる「祖国日本」、その惨状に居たたまれずに筆を執ったといった感じの警世憂国の文明論。そのひとつひとつの指摘が正鵠を射てゐて、なるほどその通りだと共感を覚える。一方で、あまりに自己喪失的な我が国の現状の深刻さにあらためて気づかされ暗澹たる思ひにもさせられたが、その筆運びは滑らかで時に諧謔に富んでをり痛快な思ひにもさせてくれる小気味良い著書である。

全六章にわたつて止むにやまれぬ著者の命がけの思ひが、繰り返し語られ一息に読ませてくれる。「質の文明」である日本と「量の文明」である欧米の対比も説得力を覚えたが、量の文明の欺瞞と殺伐さに目覚めなければ我国の将来は危ふいと現地での直接の体験を例示しつつ、日本人よ！はやく蒙を開けと強く強く訴へてゐる。

第三章「新説・昨日は今日の物語」は、あまりにも攻撃的暴力的で狡猾な西洋文明の本質に気付かなかつたばかりか、それを手本として自らの精神文明を捨て去つて滅びた無警戒極まりなきノーテンキな「大和民族」のことを巧みな譬喩で説いた悲しい物語。はやく西洋物質文明の本質を掴まえよ、はやく自らの先人たちの「健康なる歴史」の価値に立ち返れとの著者の思ひは切ないまでに一途で真剣である。

埼玉大学の長谷川三千子教授との対談「日本のアート哲学を世界に」(第五章)も読み応へがある。「歌としての日本語、武器としての外国語」「西洋のロジック(サイエンス)と日本のポエム(アート)」等々と我国が「質の文明」たる所以が語られ、およそ西洋の国々では有り得ない「終戦の詔書に隠された日本の哲学」が阿吽の呼吸で語られてゐて共感を覚えた。

著者は現在、体調を崩されてゐるにも拘らず我国の歪んだ今日の姿を憂へられ、「美しい日本」復活の一助足らんと帰国。全国各地を駆け巡って辻説法ならぬ講演演脚をつづけてをられるが、本書からも著者の祖国日本に寄せる深き愛情を感じとることができた。本書はまた自信を失つたかに見える現代日本人に活力を与へる「激励の書」でもある。久々に生き生きとした「国語」に触れた思ひだ。

(当会常務理事)

建国記念の日に想ふ

—建国の理想を仰ぎ、熱き心を持たう— (平成十七年二月十日号『国民同胞』所載)

平成十七年は皇紀二千六百六十五年にあたるが、前日の降雪による大荒れの大晦日とは異なり、穏やかな初日の出で明けた。二日の皇居での一般参賀も日本晴れに恵まれ、息子と一緒に日の丸の小旗を振つて、「聖壽万歳！」を声高らかに三唱。ご皇室の弥栄と日本国の平安を祈念した。昨年より六千九百八十人多い七万五千八十人が参賀に訪れたとのこと。国を想ふ国民の気持ち盛り上がりつつあると嬉しく感じた。

毎年、元旦には散歩がてら国旗を掲揚してゐる家を数へるのを慣はしとしてゐるが、今年はこれまで最高の十六本の日の丸に出逢つた。一昨年のワールドカップ、昨年のオリンピックの余波であらうか……。いづれにしても、潮目が替りつつあることを示す事例として嬉しく思った。

そこで建国記念の日を迎へるに当り肇国の歴史に想ひを馳せつつ、現下の我国が抱へる問題を考へて見たい。

二月十一日は、神武天皇が日向の国から瀬戸内海を渡り、紀伊、熊野を経て大和を平定し、かのとほり「辛酉年正月朔」つひたち

に、奈良の橿原の地で即位されたと『日本書紀』が伝へる由緒ある日である。明治六年、神武天皇御即位のこの「辛

西年正月朔」を太陽曆に換算して二月十一日を「紀元節」と定めた。しかし敗戦後、占領軍は紀元節の存続を断固認めず祝祭日から除外されてしまった。しかしながら根強い国民運動の結果、独立回復から十四年後の昭和四十一年、やうやく「国民の祝日に関する法律」（祝日法）が改められて「二月十一日」は建国記念の日として復活した。たしかに神話的伝承はそのまま歴史的事実ではない。しかし、そこには祖先達の世界観・自然観・人生観、いはば哲学が色濃く滲み出てゐる。「上は乾靈（天神）の…徳に答へ」とか、「…八紘を掩ひて宇にせむ」とかの神武天皇建国の理念は今日、世界のどこに出しても遜色のない立派な内容である。建国記念の日を前に、あらためて先人の掲げた理想を仰ぎ、その努力の跡を受け継ぎたいものと思ふ。そしてそれを次の世代に伝へて、誇りと自信に満ちた日本の国を創造してゆきたい。

イザナギイザナミニ神・天岩戸・ヤマタノヲロチ・出雲の国譲り・山幸彦と海幸彦・倭建命と弟橘比売・神武天皇の東征など『古事記』『日本書紀』が伝へる建国のロマンを、子や孫達に語り継いでゆくことが、この記念日の意義と思ふ。本年は中学教科書の一斉採択の年である。自国の神話を貴重な文化として記述してゐる扶桑社の歴史教科書が広く採択されるやうに、地元有志、議員とも手を携へ、教育委員会対応・情宣活動・教科書展示会への呼び込みなど、具体的行動を起さう！

祝日法には建国記念の日の意義を「建国をしのび、国を愛する心を養う」としてゐる。然るに教育現場では、この「国を愛する心」を育てることが永年に亘り等閑視されてきた。いま問題となつてゐる教育基本法の改正に関しても、「国を愛する心」の是非が論議の対象になつてゐる。自民党の安倍幹事長代理は、十一月二十九日の教育基本法改正国民中央集会で、「愛国心ではなく『国を大切にする心』なら賛成だなどといふ者がゐる。消しゴムや鉛筆を

大切にと云ふが、愛せとは言はない。国家は『大切にする』以上のもっと重いものだ』の旨を語り、「国を愛する心は譲れない！」と断言した。ぜひとも、今年には教育基本法の改正を成し遂げて欲しい。

処で、今年には日露戦争勝利百周年で戦後六十周年でもある。しかしながら北方領土・竹島の固有領土は占拠されたままだし、尖閣列島も狙はれてゐる。にも拘らず怒りを示さうともしない政治やマスコミの冷淡さはどうしたところか。日本弱体化を狙った占領政策の後遺症であらうか、残念でならない。もっともっと熱き心を持ちたいものだ。

わが国文研も今年には発足五十年目の節目の時を迎へる。八月の「伊勢大合宿」と十一月の「五十周年の集ひ」を盛り上げる中心を務める覚悟である。皆様の絶大なるご支援、ご鞭撻、ご協力をお願い申し上げます。

(成人の日に記す。数へ年・六十九歳)

近頃、痛切に思ふこと―わがノート【古稀の徒然】から―(平成二十二年十一月十日号『国民同胞』所載)

ことしの夏、日本列島は未曾有の猛暑が続いたが、そんな中、八月十五日、靖國神社に参拝した。この日、靖國の社頭を訪れ英霊に頭を垂れた人は十六万六千人を数へたといふ。多くの国民は八月十五日の意義をきちんと理解し行動してゐる証左であるが、日本国を代表する政府首脳、菅内閣の全閣僚は参拝しなかつた。

おもひいづることぞ多かるさまさまにかはりゆく世を経にし身なれば(明治四十一年 往時)

毎朝、明治天皇の御製を拝誦して力をいただいでゐるが、右の御歌を仰ぎつつ、日々の思ひを書き止めてゐるわがノート【古稀の徒然】から三点をここでは抄出してみたい。

○(某月某日)先の大戦の呼称について。現在、「太平洋戦争」の呼称が一般化してゐるが、年毎に違和感を強く

してゐる。米英に宣戦布告をした自存自衛のための戦争で、当時の政府が「大東亜戦争」と命名したにも拘らず、戦後GHQ（米国）がこの呼称を禁止したことから「太平洋戦争」が今も広く用ひられてゐる。占領政策の後遺症そのものである。

「太平洋戦争」では、昭和十六年十二月十二日の閣議で、「今次の対米英戦は、シナ事変をも含め大東亜戦争と呼称す。大東亜戦争と称するは、大東亜新秩序建設を目的とするなることを意味するものにして……」云々と定義したその意義が見えてこない。なぜ日本が連合国を敵に回して立ち上がらざるを得なかつたのかを後世に伝へるためにも、当時の呼称を使ふべきである。

○（某月某日）総理の靖國神社参拝について。昔総理は、財務相当時の四月、訪米の際、アーリントン国立墓地を訪れ花束を捧げて、戦没米軍将兵に敬意を表した。ところが前述のやうにわが英霊が祀られてゐる靖國神社には足を運ばない。「戦犯」が合祀されてゐるから参拝しない旨を語つてゐたが、その理由には何の根拠もなく、不思議の極みである。

この問題は、昭和二十八年八月三日の衆議院本会議で、四千万人もの請願を受けて「戦争犯罪による受刑者の赦免に関する決議」が全会一致で採択されてゐる。さらに戦病者戦没者遺族等援護法、恩給法の改正もあつて、軍事裁判で処刑された者を法務死として戦死者と同じく遇することになった。即ち被占領期の軍事裁判は連合国による軍事行動と同質のものだと判断してゐるのだ——この判断は国際法的にも筋が通つてゐる。従つて戦死者と同様に遺族年金も支給されてきた。国会議事録を見れば経緯は明白で、政治家だけでなく朝日を初めとするマスコミの不勉強（偏向）には腹立たしい限りだ。

○(某月某日)領海侵犯の中国人船長の「釈放」について。中国は共産党独裁の国で、「法治国家ではない」ことをまづ念頭に置くべきだ。尖閣諸島海域で発生した問題を「中国船衝突事件」と称してゐるが、明確な「領海侵犯事件」である。政府は「外国船のわが領海侵犯は許さない」と、なぜ広く世界に向つて発信しなかつたのか。当初「中国漁船が明らかに巡視船に体当たりしてゐる」として船長を逮捕したのだから、百聞は一見に如かずで早い段階でビデオを国内外に公表すべきであり、丹羽大使を深夜に呼びつけた外交上の非礼には、即刻大使を東京に召喚する等の厳正な対応をすべきであつた。

ここで共産中国の特異な政治体質を批判しても始まらない。まづは日本人の意志と力でわが領土を守り抜く決意を固め、それを内外に示すことである。島嶼の守りを海上保安庁任せの現状を改め、自衛隊の装備をどう活かすか早急に検討し即刻、具体的な手を打つべきだ。中国の理不尽な圧力に屈した形で船長を釈放した菅民主党政権には全く失望したが、領土守護への念が国民の間に高まつたのはせめてものことである。同時に先人達が国土を守るために重ねてきた労苦に思ひを致すべきであると強く感じた。

三井甲之の「ますらをの悲しきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」の絶唱を噛みしめてゐる。

(元アサヒ飲料株役員)

近頃、痛切に思ふことゝわがノート【古稀の徒然】から、そのⅡ(平成二十七年三月十日号『国民同胞』所載)

四年余り前に、標記と同じ題で拙文を書いた(平成二十二年十一月号所載)。その中で①「先の大戦の呼称」、②

「総理の靖國神社参拝」、③「領海侵犯の中国人船長の“釈放”」について、痛憤してやまない所懐の一端を認めたのであった。【古稀の徒然】とは、日々の思ひを書き止めてあるノートの名前である。

概略を記すと

① 「日本側の呼称である大東亜戦争の使用を禁じた占領軍が、戦争の本質を見えにくくするために意図的に広めた“太平洋戦争”の語が今も広く用ひられてゐる」

② 「外国訪問の総理が例へば米国アーリントン国立墓地に花束を捧げて米国戦歿将兵に敬意を表してゐながら、靖國神社に参拝しない」

③ 「領海（尖閣近海）侵犯と巡視船への体当りで逮捕した中国船々長を放免して、領海侵犯は許さないと意志を世界に発信することを怠つた」

といふ三つで、こんなことを続けてゐていいのか、先人の労苦に思ひを致すべきではないかと述べたのであつた。

四年前に指摘した三点は、少しは良くなつてゐるのだらうか。この間、危なっかしい民主党政権が交代したのは良かったが、総体として、わが国は本来の国のあり方に近づいてゐるのだらうか、との思ひを抱きながら、【古稀の徒然】は現在も折々書いてゐる。

永年、奉唱してゐる明治天皇の御製に、「思はざることのおこりて世の中は心のやすむ時なかりけり」（をりにふれて、明治四十五年）といふお歌がある。陛下の御心には遙かに及ぶべくもないが、最近のノートから一つだけ抄出してみたい。

○(二月某日) 新たなるテロ勢力の擡頭について。昨年暮の総選挙で与党が大きく勝利して、憲法改正への途が開かれる期待が膨らむ昨今ではあるが、足元を見れば総理の靖國神社参拝さへブレーキが掛かる現状にある。かうした最中、邦人二名が「イスラム国」に拘束され、政府に二億ドルの身代金を要求してきた。彼ら二人は危険を承知でシリアに渡った。人質に取って政府を脅すといふ行為は許しがたいが、改めて北朝鮮に拉致された邦人のことが頭をよぎる。北朝鮮に対する怒りが湧いて来た。世論はともすると目先のことに目を奪はれがちだが、自らの意思で中東に向いた二人と一方的に拉致された人達とは明確に区別すべきであらう。

ここ二年来、安倍首相は拉致被害者救出が最優先課題だと強調し、北朝鮮は秋(昨年)の早い時期に何らかの報告をすると言っていた。しかし言ひ逃れを繰り返すのみだ。かつて武家の時代には「敵討ち」と称して「恥辱」を雪ぐことが見られたのだが、明治六年の太政官布告で公共の秩序に反するとして禁止された。近代的な法治国家に移行したのだ。国内法はそれでいいとしても、外国が絡んだ拉致事件にはどう対処するのか。拉致された人達が気の毒でならない。政府として何も手が打てないのか。

朝鮮総連ビルも落札業者が転売して入居を続けるらしい。この時期、メディアはもつと拉致被害者の救出に触れるべきではないか。

学校の帰路にさらはれし少女は壁(をみな)(船室の壁)に縋りて泣き叫びしとふ(横田めぐみさんのこと)

○(二月某日) 二名の邦人は無慈悲にも惨殺されるといふ結末となった。国会は非難の決議を採択して、その中で、政府に「国際社会と連携して」「海外の在留邦人の安全確保に万全の対策を講ぜよ」と要請した。しかし、議員諸氏は、憲法に縛られて危険に瀕した邦人の救出に「万全の対策」を講じ得ない日本の現状を承知してゐるのかと

言ひたい。いまの憲法の下では日本は「国際社会と連携」することにも制約がある。

残念な事件ではあったが、憲法による足枷あしかせが明らかになり、憲法改正の道筋が見えて来るならばせめてもの幸ひであった。

(元アサヒ飲料(株)役員)

戦後七十年に思ふ(瓊林友の会会報・平成二十七年七月三十日号所載)

昭和二十年八月十五日は日本が初めて外国との戦争に敗れた日である。従つてこの日以降が戦後となり、今年の八月十五日で丁度戦後七十年となる。昭和から平成へとつづくこの七十年の歩みを、昭和天皇の御製と今上陛下の御製を中心に、私自身の来し方も含め、振り返つてみる。

昭和二十年八月十五日正午、昭和天皇はラジオを通して(玉音放送)「…堪へ難キヲ堪へ忍ビ難キヲ忍ビ以テ万世ノ為ニ太平洋ヲ開カムト欲ス」と戦争の終結を告げられ、国家の分裂もなく、戦後は始まつた。私は数へ年九歳であつた。大学時代に御製にふれて以来、社会人となつて現在まで折々に御製にふれて励まされ苦難を乗り切つて生きて来たと言へる。

昭和天皇御製

爆撃にたふれゆく民の上をおもひくさとめけり身はいかならむとも(終戦時)

この御製は、終戦時に昭和天皇がお詠みになつた四首の冒頭の御歌である。「爆撃にたふれゆく民の上をおもひ」と国民への溢れる思ひを述べられ、「身はいかならむとも」と結ばれた。五七五七七の音調を整へるのではなく心に思ふことをそのまま率直に詠んでをられるのかへつて心を打たれる。

この御製に続く三首の歌は以下の通りである。

身はいかにもともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らんといはら道すすみゆくともいくさとめけり

外国と離れ小島にのこる民のうへやすかれとただいのるなり

伊勢神宮に参拝して（昭和二十九年）

伊勢の宮に詣づる人の日にましてあとをたたぬがうれしかりけり

（昭和四十五年）

ななそちを迎へたりけるこの朝も祈るはただに国のたひらぎ

「迎へたりけるこの朝も」をただ単に「迎へし」あるいは「迎へたる」ではなく「迎へたりける」との御表現に七十歳をお迎へになつた深い御感動が偲ばれる。さらに「この朝も」の「も」に日々の御祈りを暗示し給ひ、「祈るはただに国のたひらぎ」と強く結ばれてゐる。昭和四十五年は三十三歳であつた私にも衝撃的な事件が起きた。尊敬してゐた三島由紀夫氏が市ヶ谷の自衛隊にて憲法改正を訴へて割腹自殺し、大阪万博で上げ潮ムードの日本国に衝撃を与へた。当時の拙詠が無いのが残念である。

（昭和四十九年）

大統領は冬晴のあしたに立ちましぬむつみかはせしく日を経たて

現行憲法では、天皇陛下はロボットのやうに見られやすいが、その天皇様が国際親善の為にどれほどお尽しになつてをられるかを我々が知る事の出来る御製である。戦後初めて米国のフォード大統領が昭和四十九年秋に訪日し、

天皇陛下にお会いひして、深く感動して帰国されたことは、当時の大統領談話として報道され、今も記憶に鮮やかである。難しい言葉は一言もない。

初句で「大統領は」と字余りながら必ず述べられ、「冬晴れのあしたに」とこれも字余りである。第三句の「立ちましぬ」で敬語はどつしりした区切れとなつてゐる。下の句に「むつみかはせし幾日を経て」と述べられ、倒置法になつてゐるが、ひと言ひと言に真心を込めて語られる陛下の誠実なお人柄そのものが表現された名歌であると拝される。このお心が外国の元首方に通じない筈がない。

「澤部通信」に掲載されてゐる当時の私の拙詠は「新しき年のほぎこと言ひ交す食卓囲み吾子らと共に」、「カルタとる子らの声々響きけり年の初めの陽光をあびて」である。忙しい中に「澤部通信」に投稿することが支へであつた。

御製

第二十五回オリンピック競技大会（平成四年）

日本の選手の活躍見まほしく朝のニュースの画面に見入る

平成四年にスペインのバルセロナで開催されたオリンピックでの岩崎恭子選手、有森裕子選手、森下広一選手らの活躍に私達が心を躍らせた事は記憶に新しい。ご公務ご多忙のなか、日本選手の活躍如何にと朝のテレビに見入られる陛下のお姿を想像するだけで、陛下の御存在が身近に感じられ、無性に嬉しくなってくる。二〇二〇年の東京オリンピックでの日本選手の活躍を陛下に御覧頂きたいと切望する。

硫黄島（平成六年）

精根を込め戦ひし人未だ地下に眠りて島は悲しき

昭和二十年、米軍は日本本土爆撃の拠点として重要な位置にある小笠原諸島、硫黄島を総攻撃した。日本にとつては国土防衛上必須の地であり、米軍の十万余の圧倒的な戦力に対し守備する二万数千の兵は、真水はほとんどなく、硫黄の臭気立ち込めるこの島に二十八キロもの地下壕を掘り決死の防衛戦を戦った。日本兵二万余名が玉碎し終に米軍に占拠された。戦後遺骨の収集は行はれたが、約五千の日本軍兵士は地下壕に眠ったままである。平成六年に硫黄島の天山に立つ平成五年二月十二日、慰霊碑に今上陛下は拝礼され、傍にたたへられた真水を碑に注がれ、白菊をお供へになった。初句の「精根を込め戦ひし」といふ御言葉の力強さ、激しさには、陛下はこのやうな表現をなさるのは稀である。兵たちの遺骨は故郷に帰ることもなく灼熱の地下に埋もれて今も眠ってゐることに、深く思ひを寄せられ、「悲しき」と結ばれた。

阪神・淡路大震災（平成七年）

なるをのがれ戸外に過す人々に雨降るさまを見るは悲しき

平成七年の阪神・淡路大震災から早くも二十年の歳月が流れた。当時アサヒ飲料の近畿圏支社長をつとめ働き盛りであつた私は想像を絶する事態に懸命に対処した結果、持病の糖尿病が悪化し「糖尿病性腎炎」に陥り、今は人工透析で生命を維持してゐる。今の心境を述べる拙詠五首。

二十年早や経ちにけり突然の地震に襲はれ目覚めたる日ゆ

我が社員全員無事と知りたるは地震の後の五日目なりき

疲れたる我が身厭はず復興につとめし日々の今懐かしき
社長の芽なければ無理をするなかれと医師言ひしが思ひ出さるる
無理重ね病ひの重くなりけりと思へど悔いは残らざりけり

(完)

附
献歌・思ひ出の記

坂東一男先輩の御逝去に際し寄せられしお歌（九月十日夕、御逝去）

府中市 青山直幸

をちこちに洪水もたらせる大雨の過ぎしと思へば訃報入りぬ
ふほうはい

ますらをと仰ぎし大人もやまひには勝てず逝きたまふ悲しからずや

みやまひの癒ゆる日願ひご家族は心尽し世話をしたまひけむに

心萎え臆する我を叱咤することく響けり大人の言葉は

みのうち
体内に力みなぎり声高に思ひ叫ばるる姿徳ばゆ

清瀬市 今林賢郁

また一人友逝き給ふみ病ひと戦ひ続けし坂東一男先輩

み病ひに急なる変事起きたるか手術行ふと聞きしばかりに

いくたびも危ふき症状に打ち克て努め来給ふ日々にてありしに
さま
かち

集ひたる箱根の一夜（三月二十八日）力こめ語り給ひしみ姿浮び来

いかばかり嘆きますらむわが友（澤部壽孫兄）は長き睦びの月日思ひて

常ならぬ世とは知れどもかにかくに悲しかりけり友は去りゆく

小田原市 岩越豊雄

この春の仙石原の集ひにて雄々しく語りし先輩逝き給ふ
おも
おほなひ
まむか

思はざる阪神淡路の大震災に真向ひつとめを果し給へり

活き活きと輝く眼と声太く語り給ひしみ姿うつつに
まなこ

獅子吼する天皇陛下萬歳のみ姿み顔いまも現に

長崎市 内田英賢

病む床ゆ合宿偲び御殿場へ御歌を賜びしと聞きまつりけり

長崎市 橋本公明

合宿の最後の集ひにアサヒビールを送り給ひし彼の日忘れじ

千葉県 内海勝彦

坂東先輩の訃報に接して

突然の悲しきしらせ信じがたくいくどもみ名を確かめにけり

七月の集ひの席に健やかなみ姿拝しいく日も経たずに

朗らかに太き声にて話さるる大人のみ姿偲びてやまず

千葉県 上村和男

坂東一男君の死を悼む

過ぎし日をふりかへり見て思ひけり一途なる君の熱き友情をこころ

蟋蟀の鳴く音も寂し君逝きて深み行く秋の夕べに聞けば

小矢部市 岸本 弘

坂東一男先輩の御霊に

時を知り散りや果つらむもみぢ葉を恋ひつつ生きむいのち死ぬまで

坂東一男先輩を偲ぶ

この春に箱根の地にて伺ひし朗なるお声の甦りくる
友らとの語らひあらば他に何も望みはなしと述べ給ひけり
折にふれ若き我らに細やかな心遣ひを賜ひましし先輩
先輩に戴きまつりし友情を思ひ返しつつ生きてゆきたし

東京都 小柳志乃夫

坂東先輩逝きましぬ

先日の集ひの折りのお元氣な姿に訃報はうつつとおぼえず
にぎはへるあの世のお呼びまだなりと語りたまひし樂しき口調に
「九州男児」を声高らかに歌ひませし遠き日のお姿今もうつつに
震災直後陣頭に身を顧みず指揮したまひしお話忘れず
ざっくばらん明るく強きお言葉にいくたびも力たまはりてこし

久留米市 合原俊光

坂東一男先輩の御霊に

先輩つひに神去りませしと聞きまつり声は出でざり足は萎えつつ
秋風に添はれたまひ永遠の旅ゆきます先輩の御霊偲びつ
旅路ゆく先輩の御霊を偲びつつ重ねたまふや悲しき杯を

雄々しくもみ國を守る戦ひに先がけたまひし先輩なりしかも

皇国のいのち守るとひたすらにつとめたまひしひと世なりけり

若き日の吾を導きひとすぢの道につなぐるえにしたまひぬ

湧き出づる思ひのたけを語ります太きみ声は耳に残れり

都路に会ひまつりける過ぎし日のみ顔み声のひたに恋しも

坂東一男先輩の訃報をいただきて

この春は仙石原にて先輩のふときみ声を聞きまつりしに

前例の道なき道も決断し前に進めと宣ひしかな

先輩の太きみこゑを聞くことも叶はずなりて寂しかりけり

坂東一男先輩を悼みて

若きらを励ましくるる先輩の高くやさしきみ声忘れじ

坂東一男さんを偲ぶ

高宮のお宅を訪ひて夜更けまでもてなし受けし頃の懐かし

豪快に飲みかつ歌ふ先輩の張りあるみ声今も現に

阪神の震災の折に示されしリーダーシップは語り草なり

逗子市 島津正數

福岡市 藤新成信

福岡市 山口秀範

み病と長く闘ひましつつも常に明るく声かけ給へり

日の本の栄え念じて様々に尽し給へる 貴き一世とらうと ひとよ

悠久の時の流れに憩ひつつみ国と親族見守り給へうから

八千代市 山本博資

坂東一男先輩を偲びて（平成二十七年九月十二日）

若き日に銀座に集ふみひ書を読み語り合ひたる先輩ぞ偲おもはゆ

若き日に葉山と箱根に設けましし集にほひの場を忘れ難きに

和歌詠うたむは楽しみなりとまよひなく語り給ひしみ姿うつつに

思ふこと思ふがままに詠うたまれたる和歌数多載る『澤部通信』

癒いえがたき病の床に和歌よめる先輩の姿の子規と重なる

なりはひにひたすらつとめみまかりしますらをのこを偲おもび止まずも

東京都 澤部和道

坂東一男先輩の在りし日を偲びて

いと太き声にて萬歳三唱を叫び給ひしみ姿浮ぶ（初参賀にて）

定年後も折ある毎に思ひ込め会社はどうかと聞き給ひけり

至らざる身にはあれども先輩の想ひ受け継ぎ生きてゆきなむ

坂東一男先輩を悼む歌

奥様と御子らの悲しみ如何ばかり慰めまつる言の葉もなし
ながとせ

長年を病ひと闘ひ力つきつひに彼岸に旅立ち給ふ

合宿の感想文と歌集を喜び給ひ一日経たぬに
うたがみ

病む床ゆ富士合宿に寄せられしみ歌が最後の歌となりけり

学生の数は少なくなり足れど思ひの深さに合宿続く（合宿最終日に寄せられし御歌）

五十年の長き歳月先輩の背中を慕ひ生き来し我は
いそとせ

歌詠みて病ひ蹴散らし雄々しくも生きつらぬける一生たふとき
ひとよ

いと太き声にて国の行く末を憂ひ給ひしみ姿徳ばゆ

おほらかに真直ぐな先輩とかたり合ふときのなれば寂しかりけり
とも

七人の御子とやさしき奥様に恵まれ看取られ逝き給ひけり
しちにん

剛くんとともに安らぎ遺されし御親族の行く手を見守りたまへ（八年前、大学在学中に急死）
つよし

九月十四日、告別式

自彊寮の友らいや次ぎ来給ひて友の旅立ち嘆き給ひぬ（長崎大学経済学部 of 学生寮）

いと深き交はりありし「八洋」の後藤さん父子のみ姿の見ゆ（アサヒビールの得意先の会長と社長）
おやこ

後藤さん（会長）の「寂しくなるね」とのひと言に深きみ嘆き徳ばれにけり

我が友と野辺の送りの斎場に立ち在りましし日を偲びやまずも（山本博資兄）
には

友情有難し

小縣一也

今は亡き畏友坂東一男君が亡くなられて二か月経った十一月中旬、縁あつて湯河原の温泉宿に一泊した。いつもと変らぬ閑静な部屋から未だ紅葉には早い周りの景色を見ながら、彼と澤部壽孫君と三人で過した楽しい夕べを思ひ出す一方、又来るとの願ひは果せなくなつた心残りのひと時に一人黙祷を捧げた。思へば長い付き合いで、彼が学生時代の昭和三十四年頃、安保騒動の時代から長い会社生活を経て今日まで、お互ひが会社勤めを辞めてからの十余年間、特に私が川崎に転居して以来、再々逢ふことが出来て、それこそ誰にも負けない元気を与へられた幸運を感謝してゐる。いま話題のNHKのドラマ「花燃ゆ」の主人公・楯取素彦群馬県令の縦横無尽の行動は、坂東君を彷彿とさせ、歌を詠みつつアサヒビールの売り込みに向け、文武両道を全うした彼の生涯は絶賛して余りあるといふべきでせう。彼にどれほど励まされたかを今更思ひをるこの頃である。「人生の大成功者とは、自分の周囲の人の生活を慎みをもって知り、その生涯に尊敬を捧げ、その独自の生き方をいとおしむ」といふ言葉に彼はまさに当てはまると思ふ。彼の思ひ出としては先づアサヒビールが挙げられる。今も私の傍らにあるが、彼の努力により国文研の合宿や集ひにはアサヒビールとなつた。三菱グループもアサヒビールを置くやうになつた。もう一つは彼の結婚式に招かれたことである。奥様にきいたら、昭和四十年であつた。確か明治記念館であつたと思ふ。

長い闘病生活だつたのに大したお見舞ひも出来なかつたことは心残りである。

それについても国文研六十周年記念式典に彼がゐなくて、共に「進めこの道」を唱へなかつたのは残念であつた。

彼はみなくなったが、「進めこの道」をひたすら歩み続けたいと思ふ。

嗚呼！坂東一男君

上村和男

君と最後に会ったのは澤部壽孫君の呼びかけにて、昨年（平成二十七年）七月に、私のために国文研の友等が集った千葉駅前の「築地日本海」であった。君も病気を押して来てくれたのは有難いことであった。その際の「お迎へが来ないのに逝くわけにはいかない」との君の言葉が忘れられない。会って二か月も経たない九月に訃報を聞き驚いた。糖尿病の治療で透析を何年も続け終に力尽きたのだらう。私も体調が悪く葬儀にも行けなかったのは残念でならない。

昭和三十六年に朝日ビルに入社した君が、私の恩師である川井修治先生の紹介で私を訪ねてきたのが、最初の出会いであった。当時の九州では川井修治先生や小柳陽太郎先生を中心に学生との読書会が行はれてゐたが、東京では学生との読書会は行はれてゐなかつた。そこで学生との読書会を立ち上げ、これが「八日会」につながつてゆくのであるが、私を支へてくれたのが君であった。君や小縣一也さんの支へなかつたらとづくに止めてゐたららう。

小田村寅二郎先生が少子化を憂ひ五人以上の子供に恵まれたものには褒美をあげると言はれたが、褒美をもらったのは七人の子供に恵まれた君一人であった。君は折々に歌を詠んだが、人柄同様、率直で飾り気のない歌であった。九州に転勤した君を訪ね、福岡の会合にたびたび参加したことも良き思ひ出である。若き日の無理がたたつて患った糖尿病が悪化して透析を受ける身になったのは残念であった。毎年夏に参加してゐた全国学生青年合宿教室に行けなくなつた君の無念さが思はれる。

青葉若葉萌える季節になりたれど君はいまさず寂しかりけり

合掌

小川 渚

好漢！『坂東一男君』の思い出

故・坂東一男君とは昭和三十一年、名門・長崎大学経済学部に入學して以来のお付き合い。特に、今は無き『自彊会』の寮生となつて、貧しいながらも共に青春を謳歌した人生の大切な友人である。孟宗竹を割つたやうな男の中の男、典型的な九州男児であつた。

お互ひに定年退職をした時、界に冠たる超高齢社会を元気で活き活きと過ごすために自彊寮の仲間とその友人十名で『自彊会』を立ち上げた。この会の決め事は①年に四回開催する。②当日の幹事は会場を決めて案内をし、宴の前にテーマを決めて三十分程講師となつてお話をする。③翌日、私とその議事録をまとめる等々であるこれは、自彊会は単なる仲良しクラブの「飲み会」ではなく生涯、体も頭も元気で向上心を持ち続けるためには「講師」に優るものはないと云う私の持論から。

丁度、節目の五十回の幹事が坂東君。昨年七月七日の七夕の日、新宿の「今半万竈」で盛大に開催した。しかも二次会の“カラオケ”まで予約しておいて、イの一番に「長崎は今日も雨だった」を例の大きな声で歌つた（議事録と写真を参照下さい）。

そのわづか二ヶ月後の九月十日、思ひがけない訃報が届いた。まさに青天の霹靂で、信じられなかつた。でも考へてみれば四年間、人工透析と苦闘しながら大学関係の行事には極力参加し、特に、最大の楽しみ『自彊会』（奥様のお話）はほぼ皆勤であつた。しかも、万人が希望するPPK（ピンピンコロリ）で旅立ち、最後まで家族に迷

■ 自彊会の写真

惑を掛けたくないと云ふ故人の家族愛であった。改めて衷心よりご冥福をお祈りします。



合掌



九月十一日の早朝、滅多にならない携帯がなった。澤部壽孫さんからだった。聞いた瞬間信じられなかった。つい二か月前、坂東さんの当番幹事役で「自彊会」が開かれ、お決まりの「小講演」の後、みんなで昔話などを交しながら旨酒を飲んだ。坂東さんはほとんど飲まなかったが、いつもの通りで特に変りはなかった。週三日の人工透析を受けながら「自彊会」への出席を最大の楽しみにされていたやうである。長い闘病生活を送られていたので覚悟は常にされていたやうであったが、当番幹事役の務めが終はると時を置くことなく逝かれたことに胸を打たれた。坂東さんとは自彊会を通じて懇意になった。学生時代には隣県出身(坂東さんは宮崎県)とは知っていたが親しく話を交はしたことはなかった。「自彊会」は大学校内にあった自彊寮に在寮した在京の人を中心に平成十三年発足し、以来年三、四回程度開催してきた。第五十回の節目の開催であったので場所も少々奮発した場所選びだった。平成十六年には高知(第十三回)、平成十八年には鹿児島(第二十回)と観光旅行し坂東さんも参加された。鹿児島市内・知覧等の予定の観光が終り一行が解散した後、坂東さんと霧島神宮に行った。広い境内を坂東さんの説明を種種聞きながら歩いた。神宮の背後に聳え立つ高千穂は古事記・日本書紀に日本神話として「瓊瓊杵尊が天降る」と書かれてをり、天孫降臨の地である等神代の話を聞かせてもらったことを記憶してゐる。日本の歴史・文化を学ぶ大切さを常に意識されてゐた。国を愛し国を憂へる気持ちを時に吐露された。恐らく思想的なものは若い時から変節しなかったのではないか。あの世逝きの一番バッターになられたが、平均余命からして残りのメンバーの寿命もさほど長いものでもないだらう。存在感のあった坂東さんの姿を見られなくなったことは誠に寂しい限りである。合掌

坂東先輩に初めてお会いしたのはいつのことでしょうか。銀座の国民文化研究会の事務所でお会いしたのは覚えてゐます。私が大学四年生のころですから、昭和三十六年のころだと思ひます。早稲田大学の山本、小幡さんたちと一緒にドストエフスキーの『地下生活者の手記』を読んでいたとき、上村・坂東先輩から怒られたときは忘れません。小田村先生のご指示があつたのでせうか。あのときは、本当にご心配をおかけしました。坂東さんは、怒るにしてもおだやかで、普段は全く明るく、おほらかな性格の活動家でした。

坂東さんといえば、「アサヒビール」ですが、葉山寮には大変お世話になりました。国民文化研究会の、通称「若いOB」と呼ばれた若い会員が、二泊とか三泊しながら、研究発表や聖徳太子のご本の輪読を行いました。JRの逗子駅で降りて、バスで海岸沿いを走り「清浄寺」で下車すると、目の前にありましたね。「葉山合宿」の第一回が、昭和四十二年二月に開催され十二名参加しました。坂東さんは、「まごころ」と「勇氣」と題して発表されました。「まごころ」を中心にした人とのつながりが自分の仕事であり、「まごころ」を現す「勇氣」が日々の活動の実践である、というのがその内容でした。これは終生まったく変はらぬ坂東さんの信念だつたと思ひます。

この年の六月に私は二十九歳で結婚しましたが、この時に澤部さんが大阪から東京勤務になりました。

第二回、四十三年には、十七名参加。坂東さんは「国防について」発表されました。私は「乃木將軍」について話しましたので忘れません。まあ、このころは皆元気があり、毎日のように国文研の仲間は何かと会つてゐましたね。第三回四十四年には、十九名参加。十二月に坂東さんは、東京から福岡支店へと転勤されましたが、このアサヒビールの葉山寮は、この外にも、全国学生リーダー合宿、早稲田大学合宿（十四〜十六名参加）などにも使はせて

いただきました。多少、自由で勝手すぎる使ひ方があり、管理者には、随分とご迷惑をおかけしました。坂東さんには何度も謝っていただきました。

昭和四十七年に、私はガリ刷りの「OB通信」を発行しましたが、それによると、二月十一日、坂東さんが東京に出張で来たというので、雨の中をOBが続々と集まり、八名が渋谷で飲んだと記されてゐます。とにかく坂東さんは人気があった。もちろん、このときもビールはアサヒです。この席上で小幡さんが、正大寮に入寮したいと思表明をしたのです。これも、アサヒビールの力だったのででしょうか。この年の阿蘇合宿で、坂東さんは運営委員長だった。外来講師の胡蘭成さんの宿泊のことで、大変お忙しいなかをご奔走いただいたことを覚えてゐます。この夏合宿が終つて、山本博資さんの肝いりで「江戸川アパート」（飯田橋）が借りられ、ここで「若竹会」の輪談会や各大学連絡会議、岡山の前島合宿の打ち合はせなど、ここでやりました。小田村先生は、各人は「核人格」になつて活動せよとおっしゃるし、この四十七年は盛り上がりましたね。

昭和五十年の総会（東京虎ノ門の国立教育会館）で、三十七歳の坂東さんは理事に就任されました。澤部さんは、ニューヨーク在住で、印鑑証明、資格証明の書類が取得するのが難しいとのことで、取りやめざるをえなかつたと小田村先生がおっしゃつたのも懐かしいこの時の思ひ出です。

平成二年五月二十七日、「アサヒビールの坂東さんからです」といつて、突然、トラックで学校にジュースが三十箱届きました。私は金井高校の教頭になつたばかりで、ビックリしました。賞味期限の近づいたジュースだったのか。箱には、大きなビンが何本も入っていましたから、大変な量です。ちょうど、先生方との学校経営が難しく、特に日の丸の掲揚で悩んでゐましたので、「飲んでください」といつて先生たちに渡すと、ニッコリ笑つてくれまし

た。とくに、体育科の先生は大喜びで、部活の終わった後、生徒たちとジュースを飲んでみました。ところが、今度は、自宅にトラックがきて、また何十箱とジュースが届きました。もう何と良かったのか、飲みきれませんよ。小田村先生はおっしゃった。「今日の会合に友がいないと、櫛の歯が一本抜けたやうな淋しさを皆が感じる」と。今、その思ひを強くしています。

山本博資

坂東一男先輩を偲びて―仕事と家庭生活と和歌―

坂東一男先輩に初めてお会いしたのは学生の時で、当国民文化研究会の事務所が銀座七丁目の柳瀬ビルにあった頃で、初代の小田村寅二郎理事長、上村和男先輩も一緒に会合の席であったと思ふ。「アサヒビールの坂東です」と自己紹介された時の印象は、活力旺盛なビジネスマンであり、「アサヒビール」の言葉が不思議と耳に残ったことであった。学生の際は、大学も学年も一回り違ひ、「全国学生青年合宿教室」で一緒に学んだことはないが、合宿の地には開催毎に大量のアサヒビールが贈り届けられ、我われは大いに喜んで頂いたものである。また、葉山や箱根の同社の保養所を我われの会合に使はせて頂いたことなども懐かしく思ひ出され、先輩の変ることなき有形無形の心遣ひを忘れることはできない。

坂東先輩の企業人としての仕事ぶりや業績については、長崎大学での後輩である澤部壽孫氏が「国民同胞」第六五二号に詳しく余すところなく紹介されてゐる。アサヒビールが急成長し業界トップの位置を占めるまでになった原動力と言はれてゐる「アサヒスーパードライ生ビール」の開発・市場への投入・拡販では、営業の最前線で先頭に立ち指揮されたと伺つてゐる。この激務で健康を損なはれ、後年に御苦勞されることになった。

多忙な会社生活の中でも、家族、殊に御子様達を氣遣ひ思ひ遣る御心が大変に深かったことを、遺文を読んで改めて偲ぶのである。御子様達は立派に成長されおのおの家庭を持たれてゐる。その中で七番目の御様が大学在学中に急逝されたことが悔まれ、胸中如何ばかりであつたかとお察し申し上げるのである。

会社と家庭のいづれにも偏ることなく両立させてをられた見事な生涯であつたと拝察するのである。お亡くなりになつた平成二十七年の年賀状には和歌が添へてあつた。

—お題【本】に寄せて—

嬉しかり白内障の手術受け本読む楽しみ甦りけり

坂東先輩の晩年は病との闘ひであつたと推察するが、驚異的な精神力でその都度危ない状態を乗り越えてこられた。その力の基は「和歌を作ること」にあつたと思ふのである。御自身も「和歌を詠むのは楽しみである」と告^つらしてをられる。その姿は、歌人であり俳人の正岡子規と重なつて見ゆるのである。また、二月には「国民同胞」(第六四〇号)に掲載された御製・御歌謹解の拙文に対して、感想文と共に和歌二首が添へられてゐた。

嬉しかり波乱万丈の世の中に両陛下はお健やかにますを拝せば

古いにしへに想ひはせつつ正殿を心を込めてをろがみ祀る

三月には、箱根仙石原で開催された関東地区在住会員の合宿の帰途の状況を詠まれた和歌を頂戴した。

三人みたり(注・坂東、澤部、山本)にてロマンスカーに揺られつつ家路へ向ふ心たらひて

また、同じ三月(十四日)の上村和男前理事長を囲む昼食会では、久方ぶりの上村様との面談で「元氣を貰ひま

した」と認められ、和歌が添へられてゐた。

指定さる千葉の飲み屋の店頭で手をふり我を迎へる博資スケさん

ビール飲みつまみを食し『國權』（福島県南会津郡の銘酒）のうまさひき出す熱燗あつかんの酔

坂東先輩が作歌の手本とされてゐた明治天皇御製のなかの一首「おもふこと思ふがまゝにいひてみむ歌のしらべになりもならずも」を実行してをられると勝手に思ふのであるが、これらのお歌は、正に歌をつくることが生活に密着してゐる、と言ふより生活の一部であつたと拝察するのである。

「ヤット八十路！もう一頑張りです！」（前述の年賀状の添書き）と、坂東先輩は、彼岸においても、「スーパードライ」を飲みながら、短歌創作に力を注がれてをられることでせう。心から御冥福をお祈り申し上げます。

柴田悌輔

112

「正直」な人

昭和三十七年の十月頃でした。當時は銀座にあつた国文研の事務所で、讀書會が行はれ、私はそこで、坂東さんに初めてお眼にかかりました。その後、讀書會での小合宿、忘年会などに、アサヒビールの葉山寮、強羅寮などを、安價に利用させて頂いたのも、坂東さんのご好意からでした。

當時の私たちにとつて、呑める酒といへば焼酎無味無臭の甲類ぐらいで、ビールとかウイスキーなどは、別世界の高嶺の花でした。それを安價に吞ませて頂けるのも、讀書會に参加する目的だつたと思ひます。

あれから五十餘年、慕はしい先輩が又一人、天上に旅たれました。人生の約束事とはいふものの、何とも無念な思ひが先に立ちます。坂東さんは、「正直な人」でした。「正直な」といふ言ひ方には、少し説明が必要です。昔、

坂東さんが、こんな發言をした事があります。「ビールとは、アサヒビールの事をいふので、それ以外はビールではなく、單なる清涼飲料水に過ぎない。」

坂東さんの愛社精神が言はせた表現と、當時の私は微笑する思ひで、この發言を聞いた記憶があります。だが今になつて私は思ふのです。坂東さんは自分が勤務する、アサヒビール株といふ企業に、一種の「公」に近いものを感じてゐたと思ふのです。

サラリーマンを経験した人には、程度の差はあつても、この種の感覺は理解できるのではないでせうか。私たちは企業といふ法人に、「雇はれてゐる」のではなく、「參加してゐる」といふ、感じ方が好きなのです。

小泉政權の頃、「新自由主義」といふものが、喧傳されました。この頃、「會社は誰のものか」といふ議論がありました。或る者は資本家のものであるとし、又或る者は従業員のものとし、主張しました。私は後者に組したかつたと思ひます。だがそれを廣言するには、少しばかりの勇氣と正直さが必要でした。坂東さんはかうした「正直さ」を體現した人でした。自分の勤務する企業に、「公」を感じる心とは、實は日本といふ國に、ひいては皇室に「公」を感じる心に繋がる事を、坂東さんは無言で示してゐたのかも知れません。

現代では「正直」といふ徳目に、餘り重きが置かれてゐません。「あの人は正直な人だ。」といふ評價は、さう褒め言葉とは受け止められない傾向があります。だが例へば政治家がその種の「正直さ」を失えば、國民は政治といふものに、「信」を置かなくなるでせう。そんな意味で私は「正直」といふ徳目に、大きな價値を今感じてゐます。それを思ふと、今になつて、坂東さんといふ得難い人を失つた大きさを改めて思ふのです。

坂東一男兄の御霊をお慰び申し上げつゝ

坂東一男兄が逝去されて以降、唯唯悲しみはつゝのるばかりで、月日は恨みがましく過ぎてゆきました。兄が祖国再生のためにご尽力になった偉業の大きさが時の流れと共に愈々尊く心に沁みて思はれます。

私が兄にご縁を頂くきっかけとなったのは長崎大学に入学後間もない昭和三十六年八月に四泊五日の日程で雲仙にて開催された第六回「全国学生青年合宿教室」でした。そこで受けた衝撃的な感動を胸に母校長大に戻り、合宿教室の先輩である坂東一男兄と田川和昌兄及び田口譲二兄の三人によつてつくられてゐた「長大信和会」に入り、先輩方のご指導をいただきながら、「共に学び」、「共に人生を考へ」、「共に祖國を想ふ」といふ道程を歩き始めることになりました。信和会の先輩方の中で坂東一男兄はアサヒビール東京本社勤務となり、十八銀行にお勤めになられた田川和昌兄と山口銀行長崎支店にお勤めになった田口譲二兄のお二人は長崎に残つてをられました。

国文研では、翌昭和三十七年八月に開催される合宿教室の運営の一翼を担ふ班長、副班長に学生自身を当らせるといふことが内定されました。そこでその任に当る学生の研修が必要となり、同年三月の春休みを利用して、全国各地からの幹部学生合宿が東京青山の日本青年会館で一週間営まれました。長大からは澤部壽孫先輩（経済学部二年）と私（同一年）が選ばれて参加することとなりました。今にして思へばまことに畏れ多いことながら、小田村寅二郎先生はその全期間にわたつて参加学生と寢食を共にされてご指導をたまはりました。この合宿の宿舎は坂東先輩の御勤め先アサヒビールの阿佐ヶ谷独身寮でした。私は初めてお目にかかりましたが、田川、田口両兄より多くのことを伺つてをりましたので、旧知の先輩にお会ひする気持ちでした。その日の夜御馳走とアサヒビールを飲

ませて頂きながら拝聴した國づくりの基を論じられる兄のお話は深夜に及び圧倒されるばかりでした。青山の合宿で学んだことに加へ、坂東兄との出会ひは、帰崎後の私自身の学究姿勢と学ぶ意欲は勿論の事、信和会での私達の活動にも大きく影響することとなりました。例へば当時既に国文研から刊行されてゐた黒上正一郎先生のご著作『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』や『明治天皇御製集』あるいは正岡子規の『歌よみに与ふる書』などをそれまで以上に心をこめて読むやうになり、澤部兄を中心とする信和会での輪読や短歌の相互批評にもさらに熱意をもつて取り組むやうになりました。二十歳になるかならないかの時に、師、先輩、友人にめぐり会へた体験はその後の私の生き方の出発点となり、今現在に至まで私の精神生活を支へてくれてゐる柱であります。

一昨年十月末に「皇居勤労奉仕」のために上京した折に澤部兄の計らひで約四十年ぶりに小縣一也先生、御子息の健一様と共に坂東兄とお会ひする機会を得ました。余りにも御瘦せになつてゐて若かりし日の兄とは見違へるほどで、ご体調が案じられました。眼光鋭き中にも人なつっこい温かいまなざしとよく通る大きなお声は全くお変わりなく今でもそのお声は残つてゐます。その折、話が青森の長内俊平先生に及んだとき、少し声を低めて「実はここだけの話だが青森の桜を見に行く旅の計画があるのだよ、勿論本当の目的はそれにかこつけて長内先生をお訪ねすることなんだけどね」と茶目つ氣たつぷりの表情でお話になつたのが今でも強く印象に残つてゐます。悲しいことに長内先生が寝食を共になさつてゐた奥様が三月末にご逝去となり、この旅は奥様の御霊前にお参りする旅に変わりました。この旅の前に坂東兄から戴いた三月二十一日付のお便りに「久々に長内大人に逢へる日の間近に迫り心弾むも」の歌があります。そして、その旅は五月九日、十日と決まり、飛行機や宿の手配も終つたあとで、坂東兄に飛行機はままならぬとのドクターストップがかかり、あれほど楽しみにしてをられた旅を断念せざるを得ないこ

とになりました。その時戴いたお便りの最後に「無念にも楽しみなりし津軽への旅夢と散る桜と共に」のお歌を拝し、兄のご胸中は如何ばかりであつたらうかと偲ばれ涙が滲むばかりでした。

兄は平成二十二年十一月と二十七年三月の二回にわたり、月刊『国民同胞』に「近頃、痛切に思ふこと―わがノート古稀の徒然から」といふ同じ題で寄稿されてゐます。その骨子は若き日に兄がアサヒビールの阿佐ヶ谷独身寮で獅子咆哮されてゐた、正にそのままのことではありますが、そのことは兄が人生に対処された姿勢の一貫性と國家の基本問題の核心をとらへ、これを打破せんとして命懸けで取り組んでこられた超人的な精神力の偉大さ、高潔さを示す何よりの証左であります。

これら二つの巻頭言の中で、兄は「痛憤してやまない」その胸中の想ひを綴られ、「こんなことを続けてゐていいのか?」「先人の労苦に思ひを致すべきではないのか?」問ひかけてをられますが、兄はこの問ひを読者に問ひかけられる前に、兄「自身があらゆる事態に於いて、あらゆる物事に対処せられるとき、常に自らの問題として、先づ自らに対して問ひかけられ続けてその人生を生き抜かれたのだとつくづく思はされるのであります。「わが國は本来の國の在り方に近づいてゐるのだらうか?」と深き憂ひを抱かれつつ、先逝かれた坂東一男兄の御霊が少しでも安らぎお喜び下さるやうな生き方を目指して遺されたお歌、御言葉を道しるべとして、この世に生きるべく残された時間を私なりに精一杯努めて参りたいと念じてをります。

「朝日ビールの坂東さん」!

教員で民間会社の厳しさを知らない私が、七歳年下でありながら、生意気にも、坂東一男さんに向って「坂東さんは、日本一のセールスマンですからねえ」などと、何度か申し上げたことがあった。それは次のやうな忘れられない光景を目にしてゐたからである。昭和四十六、七年ごろのことだっただらうか、銀座七丁目にあった当時の国文研事務所に集まつた若手会員七、八名と会合終了後に新橋駅方面にながれ、西口の居酒屋で一杯飲んでから帰らうかといふことになった。何とか空いてゐる店があつたのは良かったのだが、あいにく朝日ビールが置いてなかつた。仕方がないといふことでその店に入ったのだが、坂東さんは何やら店の主人と短時間ではあつたが話し込んでから、我々仲間が座つた席に着かれた。しばらく朝日ビールに非ざるビールを飲みながら歓談して揃つて店を出た。その時、坂東さんが「それじゃあ、来週二ケース入れるから」と主人に言はれたのである。聞き違ひではないと思ふが、さう仰つたのだ。その時の快活で、さはやかな前向きなお姿が私の記憶に深く刻まれた。たいしたものだと感心させられたのであつた。その後、折々、坂東さんにお会ひする度に、脳裏に浮ぶのは、あの日の光景であつた。われわれ関東地区の若手会員は、坂東さんのご好意で、箱根や葉山にある朝日ビールの保養所を小合宿や読書会の忘年会などで何度も使はせてもらった。そればかりかオールドの会員を含めた関東地区全体の国文研の忘年会でも葉山寮を使はせてもらったことがある。一部日帰りの方もをられたが、泊りこみでの国文研忘年会はこの一回だけではなからうか。小田村寅二郎理事長もお泊りなつたはずだ。私が教員になつて一年目の昭和四十四年のことだつたと思ふ。九州や関西、北陸からの若手会員も参加した小合宿でも葉山寮を使はせてもらった。

さらに「朝日ビールの坂東さん」と言へば、大合宿（合宿教室）の四泊目の「最後の夜集ひ」である。司会者の「朝日ビールにお勤めの坂東さんからの差し入れです」との紹介に、参加者一同、毎年歓声を上げつつた缶ビールに渴きを癒やしたのであった。その都度、坂東さんのお仕事ぶりは凄いんだらうなあとお察ししたのであった。

九州以外の地で初めて開催された厚木での大合宿（平成三年八月）では、導入講義を担当されてゐる。日頃のお仕事ぶりが自づとにじみ出た力強いお話だった。平成十一年五月、国文研監事・星野貢氏が企画された新潟県三条市で開かれた「県中央文化講座」でも、「楽しき哉、わが会社人生―元氣を出さう」との演題で講演をされてゐる。星野監事が会長をお務めの中央塩ビ製作所の事業場が三条市にあったことからの文化講座で、国文研常務理事・長内俊平氏、国文研会員（医学博士）・江里口淳一郎氏も登壇されてゐる。新潟県は私の故里なのでよく覚えてゐる。

坂東さんは、何事によらず物事を真つ正面から受け止められた方だと思ふ。それ故に営業の場であれ、何であれ的外されるやうなことがなかったのではないかと思ふ。さらにお心遣ひに長けた、温かなお心をお持ちの方だった。お側にあるだけでその温もりか自づと伝はってくるやうに感じたものだった。

朝日ビールが「アサヒビール」となり、「スーパードライ」が大ヒットして、今やどこの居酒屋でも飲めるが、その時、笑顔の坂東さんがいつも臉に浮ぶのである。

実行の人、坂東一男先輩を偲んで

小柳志乃夫

東日本大震災からまだ間もないある日、渋谷の国文研事務所での会合で坂東先輩と久しぶりにお会ひした。話は

震災のことになって、坂東先輩が、「菅直人は何で非常事態宣言をしないのか」と話し出された。僕が横から「日本には非常事態法が制定されてゐないので非常事態と宣言しても何ら法的な意味はない。仕方ないのではないですか」と口を挟んだところ、先輩は直ちに「そんなことを言つてゐるからダメなんだ！ 総理が非常事態を宣言したら日本人は皆ついでいくんだ。日本人はさういふ国民なのだ！」と、あの大声でたしなめられた。そして先輩のお話は阪神大震災時でのご自身の体験談に及んだ。当時、アサヒ飲料の関西の責任者であられた坂東先輩のところへ、新潟を始め過去の付き合ひのあつた各地の取引先から続々と見舞金を送られてきたこと、集まつた多額の「ゲンナマ」を罹災した社員家族に全部配つたこと——「ああいふときはゲンナマが一番大事なんだ」と仰つた——、東京本社でこの対応が問題となつてわざわざ関西まで注意にきた本部社員を一喝して追ひ返したこと、一方、自治体の緊急支援助物資輸送のため自社の営業車両を日常の自販機補充業務で罹災地の裏道まで知り尽くした運転手をつけて提供したこと、後日これで市の表彰を受けたこと、この非常時の対応で結局は注意処分でなく昇進したこと、といったお話しで、それは非常時の現場指揮官のリーダーシツプのあり方を身をもつて示された、痛快なご体験談であつた。坂東先輩は理屈よりも行動を重んじられた。そして仲間に、日本国民に「信」を置いてをられた。

もう一つ国文研の会合のことで思ひ出すことがある。いつだったか若手の運営委員で検討した計画（具体的な内容は覚えてゐない）が議論され、その計画のはらむ問題点が指摘されて修正が入つたときのことだが、坂東先輩がぼつんと「そんなものかね。大体やりたいことをやって間違つたことはないのだがね」と仰つた。忘れがたい一言である。それは、ご自身の経験から出たお言葉であるとともに、若いメンバーへの信頼と、大事なことはむしろ全力で実行することだといふご覚悟が示されたお言葉だと僕は受け取つた。

先輩は合宿のパンフレットや国民文化講座の案内ビラをいつでも携行されてゐた。八月十五日正午は一人職場に起立して黙禱を捧げられると聞いた。合宿でも国民文化講座でも国歌斉唱のときにはいつもあの大きなお声が会場に鳴り響いた。入院先に見舞ひにきてくれた亀井孝之先輩がスポーツ新聞を持ってきてくれたと嬉しさうに語られてゐた……。胆の据わつたまつすぐでざつくばらんなお人柄、行動に直結する明快な議論——懐かしい坂東先輩、どうもありがとうございました。

坂東一男さんの略年譜(数へ年)

昭和十二年五月二十日(二歳)

父(嘉市)と母(イツ)の間に宮崎に生れる

昭和二十五年三月(十四歳)

横浜市立日下小学校卒業

昭和二十八年三月(十六歳)

小倉市立白銀中学校卒業

昭和三十一年三月(十九歳)

宮崎県立大宮高等学校卒業

昭和三十六年三月(二十四歳)

国立長崎大学経済学部卒業

昭和三十六年四月(二十四歳)

アサヒビール株式会社東京支店に見習ひとして入社

昭和三十六年七月(二十四歳)

東京支店業務課

昭和四十四年九月(三十二歳)

九州支店地方課

昭和五十二年十月(四十歳)

仙台支店販売二課

昭和五十五年十月(四十三歳)

仙台支店次長

昭和五十九年八月(四十七歳)

新潟支店長

昭和六十三年九月(五十一歳)

東京本社 of 飲料部長

平成二年九月(五十三歳)

アサヒ飲料株式会社に出向、取締役兼近畿圏支社支社長

平成五年九月(五十六歳)

常務取締役兼近畿圏支社支社長

平成九年九月(六十歳)

常務取締役兼首都圏支社支社長

平成十一年九月(六十二歳)

専務取締役兼首都圏支社支社長

平成十三年三月(六十四歳)

顧問(非常勤)

平成十四年三月(六十五歳)

アサヒ飲料株を定年退職

平成二十七年九月十日(七十八歳)

逝去

編集後記

坂東一男先輩の御霊の御前に本書『あさひ』を謹んで奉呈させて頂きます。

本書の題名「あさひ」は坂東先輩さんが毎朝拝誦してをられた明治天皇御製の「日」と題する「さしのぼる朝日のことくさはやかにたまほしきはこころなりけり（明治四十二年）」より採らせて頂きました。

遺詠は、『澤部通信』（昭和六十二年一月〜平成十四年四月）及び折田豊生さんが発刊された『短歌通信』（平成十四年五月〜平成二十七年八月）所載のものであり、遺稿は、最後の一文は長崎大学経済学部同窓会・『瓊林友の会の会報』から、残りは全て国文研の機関紙『国民同胞』から収録させて頂きました。

アサヒビール株式会社に奉職された先輩は、アサヒビールの販売および皇室を中心とする日本の文化・伝統を若い人達に伝える国文研活動に、全力で取り組まれ生涯を全うされました。七人の子供（裕君、文子さん、恵子さん、陽子さん、幸子さん、直子さん、剛君）に恵まれ、国文研、アサヒグループでも一番の子沢山でありました。

会社の朝礼で全社員を前にして明治天皇御製を朗々と拝誦された先輩は、身を省みぬ活動によって糖尿病が悪化し、透析を余儀なくされましたが、三年半の壮絶な闘病生活のなかで、悲壮感は全くお見せにならず、死ぬ間際までご家族と国に行く末を案じてをられました。「アサヒは飲むものであって読むものではない」との辛辣な朝日新聞批判の名言も残されました。五時間の透析を終へ日赤病院からの帰途、しばしば渋谷の事務所に立ち寄りられました。透析後のお疲れの見えるお顔が、折々の時局を憂ひて大きな声で語られる内に、生気みなぎる御顔に一変して、お帰りになるのには驚かされました。お歌と同じやうに、我々も元気を頂戴しました。先輩と私が同一地域で働いたのは、短期間でありましたが、会はなくともお互ひに歌を通して親交を深めることが出来、それが揺るぎない絆となりました。編集、発刊にあたりお世話になりました奥様・厚子様および折田豊生様に御礼申し上げます。

小縣一也、合原俊光、澤部和道及び澤部壽孫の強い念願によって本書は刊行されました。

あさひ

— 坂東一男 遺詠・遺文集 —

平成二十八年九月十日発行 一〇〇部 非売品

編集委員 山本博資 磯貝保博 山内健生 島津正數 澤部壽孫

編集協力者 折田豊生

発行人 公益社団法人 国民文化研究会

理事長 今林賢郁

〒150-0011 東京都渋谷区東一—十三—一—四〇二

電話 〇三—五—四六八—六三—〇

FAX 〇三—五—四六八—一四七—〇

印刷所 麻屋三英社

東京都千代田区神田錦町一—一—五

〇三—三—二九一—三〇七—〇

